

土 淨

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
昭和十四年四月廿日印刷納本
昭和十四年五月一日發行

第五卷 第五號

五
月
號



◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務部宛に！ 領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

健康の安全地帯

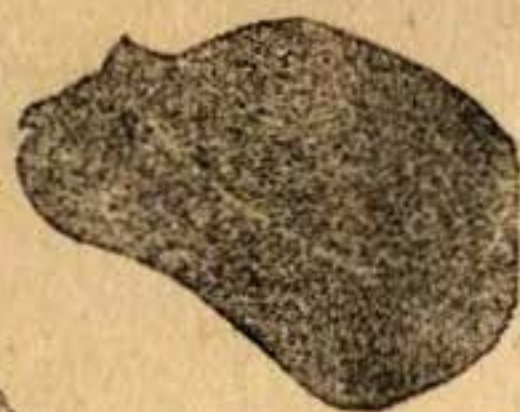
朝夕一球宛の

「理研ビタミン」で……

風邪をひかなくなる
結核を防ぐ力がつく

見よ！この力價！

理研ビタミンは純粹のビタミンAとDを最もよいグロビニール球に包んだ強力製品です。一球中に七〇〇國際單位、すなはち國際二十五分のビタミンAを含有し朝夕一球宛の常用で斷然抵抗力がつき、呼吸器が強化され、風邪をひかなくなり結核も豫防される。國民體位の向上に理想的營養劑として推薦される。



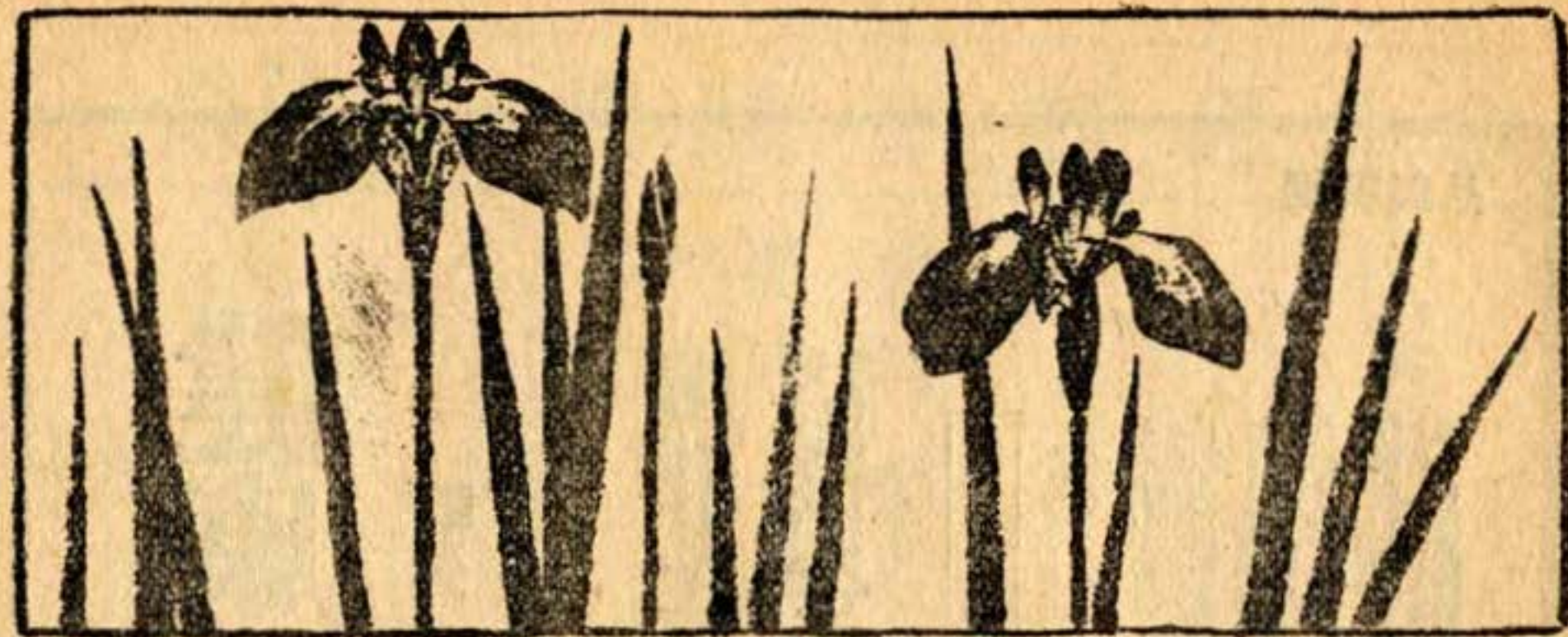
理研ビタミン

(包裝)

四十球入 百球入
五百球入 千球入

婦人子供用小粒製品

五拾球入 一、三〇
百球入 二、五〇



◇浄土第五卷五月號目次◇

表紙・扉繪……………熊倉鎮雄

淨土の安心

郁芳隨圓……………(六)

說苑善惡の彼岸……………佐藤賢順……………(三)

隨筆 桐の花咲く……………吉田絃二郎……………(八)

念佛者は強し……………佐藤春夫……………(二)

江戸の法然上人……………松本龜松……………(一)

北

支

偶

話

柴田玄鳳……………(五)

隨想 遺品と傷兵……………島野禎祥……………(四)

信 仰 相 談……………中村辨康……………(九)

信 座 談 「宗教への門」を語る座談會……………(四)



讀者 感激の一夜……………長田たい子（五）
の會 好もしい會……………鳴海要吉（六）

知恩院より法然院へ……………和田正系（二）

銃後 遺骨の出征……………野原完二郎（四）

コント 念佛結婚……………藥師寺 章（六）

小説 耳で救はれた雉……………岸 大雲（四）

歌 壇……………與謝野晶子選（九）

俳 壇……………太田耳動子選（七）

漫畫 非常時潮干狩……………大羽比羅夫（元）

動行式 解 説 信仰への資糧に……………中村辨康（九）

讀者 だより……………（四）

鑑仰運動ニュース……………（五）

編輯 後記……………（五）

講話

淨土信仰の眞髓は實にこの一文に盡く！

日本信仰史上に燦然と輝く法然上人の『一枚起請文』。この一文の中に籠る信仰の精神を知らずして、信仰の何々たるかを語るは潜越である。この簡潔流麗なる語句の中に脈うつ深く豊かな宗教の眞理が當代隨一の名講義によつて、解り易く讀者の心に滲込んで行く！

枚

起

請

文

宗教講話に新生面を開いた名講義！

定價 拾二錢
送料 共

發行所

法然上人鑽仰會

振替……東京八二二八七

布教用書の
最高峰

本會は特に淨土信仰普及のため左の如き犠牲的奉仕をなす

一度に十部以上 購入されれば 一部當り 九錢（送料不要）

寺院の布教用、工場會社等の修養讀物として、最適！

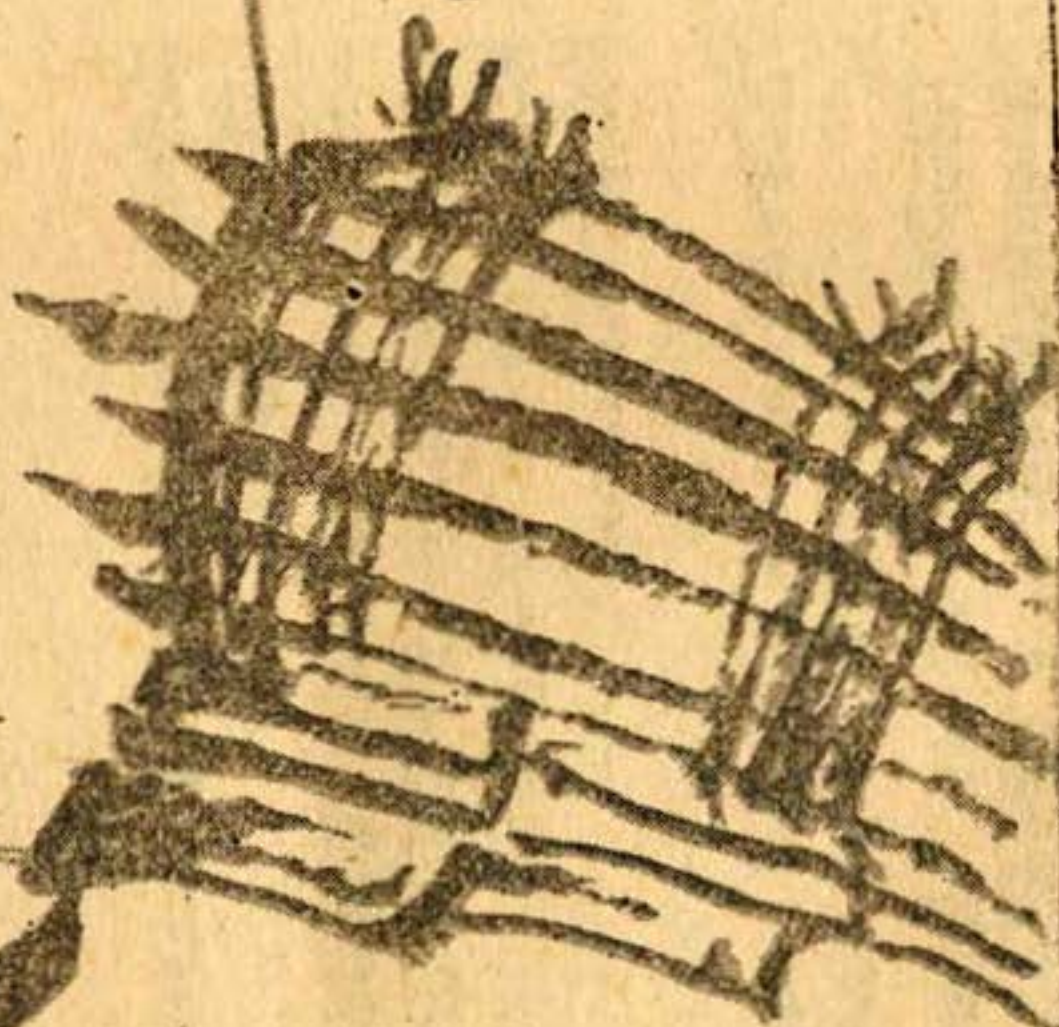
淨
土

五
月
號



住生はよにやすけれど
みな人の
まことの心
なくてこそわ

法然上人詠歌





浄土の安心

浄土宗管長
知恩院門跡

郁 芳 隨 圓

念佛にはいろいろありますが浄土の念佛は阿彌陀如来の本願に歸命するであります。彌陀の本願を絶対に信じて南無阿彌陀佛と念佛するのであります。

これは元祖法然上人が支那の善導大師の書物から發見されて日本に傳へられた絶対他力本願の教でありまして、これが浄土門であります。

元祖上人がこれを我が國に廣めるに當りまして、皇祖天照大神の御神慮にかなふか否かについて深くお考へになり、伊勢の大廟に一週間御參籠になつて、大御心をお伺ひになりました。一週間満願の日に、旭日日輪の中に六字の御名號がはつきり顯れたと言ふ事が七卷傳と言ふ書物の中に記されてゐます。法然上人の御傳記勅修御傳は上人滅後百年に出來たものでありますが、七卷

傳と言ふのはそれより前に出來た古い書物であります。

太陽は大神の御神體でありまして、そこに六字の御名號が顯現したのでありますから、念佛の宗旨が大神の御心になひ、國民の爲になると言ふ事をお信じになり、日本に浄土宗を廣める事を決心されたのであります。今も伊勢の欣浄寺には日輪中に六字の名號を書いた寶物があります。

×

浄土門は念佛を少しでも廣めて國家に役立たせんが爲であります。

念佛は元來佛、法、僧の三寶について、一體三寶、別相三寶等に依つて、佛の解釋が違ひますが、結局は自分の中に佛を具現するのであります。

佛とは悟る事であり、その悟には自ら覺るのと、他をして覺らしめるのとの二種があるのであります。そして最後まで悟りぬかねばなりません。即ち知覺する事は、宇宙の本體を識り、善惡を辨別するのであつて、これを法身と言ふのでありますが、それを修業の功によつて成佛した佛様を報身と申します。然し之は誰にも出来ると言ふ譯にはまありません。

人間は得て惡に染り易いものであります。心を主とする事なく、心の師となれと教へるのですけれども、自分一人では凡人として仲々そうは参りません。

彌陀は法藏菩薩と申され過去世に於て發心され、長い間の修業によつて阿彌陀如來になられたのであります。

阿彌陀とは、無量即ち功德無量と申す事でありまして、その中には光明と壽命が含まれてをります、即ち光明は智慧であり、壽命は慈悲であり、光明を從とすれば壽命が横であります。

この様な完成された阿彌陀如來の智慧と慈悲即ち光明と壽命とにおすがりして、自分の心を照へることの出来ぬ私たち凡夫は救つて頂くのであります。

阿彌陀様に身も心も全部打ち込んでおすがり申してゐると、阿彌陀様の慈悲と智慧を感受することが出来、又それによつて有難く慈と智がのりうつて來るのであります。

たとへば暗闇の時、室内に何があつても見えませんが、日輪の光が、入つて來ると室内の穢い事が分り、それが解れば、掃除をせねばなりませんことにもなります。

それが壽命であり、壽命に依て自らを達成せしめる事でありま

す。かくいたしますと、やがて慈悲と智慧を受けますから、未來往生と云ふことも分る様になりますし、また壽命のある限り、人の爲國の爲に盡す決心がつく様になるのであります。

生けらば念佛の功つもあり、死なば淨土に参りなんと申された元祖法然上人の深いおこころが察せられ、我を捨て、安心して國家の爲に盡す決心がつくのであります。即ち我が身を心配しては人の爲にはなれません。自分の身を顧みせず、死生を解脱超越すれば、そこに念佛報國の至誠が顯れると思ひます。

慈悲と智慧の佛身を感受すれば、我が身はどんなでもよい、そこに滅私奉公と言ふ念が生じます。自分を無にして、人の爲世の爲に盡しうる心境になる事が、淨土の安心であります。

慈心を以て相向ひ、佛眼(知)を以て相見合ふ、即ち相敬愛し、皆お互ひに佛様だと思ひ合つて行くのが淨土の安心であります。南無阿彌陀佛。

(本篇は淨土宗檀信徒の代議士の會合である淨光會の當日、懇々東上せられたる本會總裁が行はれた垂訓である)。

桐きり の 花はな 咲さ

く

吉田玄二

今朝會津の田舎に歸つた友人からのたよりがあつた。故郷の家が全焼の厄に遭つたので、久し振りで故郷にかへつたのだといふことであつた。そしてそのたよりの最後にカシラダカやカハヒバや山鳩の鳴いてゐることを附け加へてあつた。わたくしは友人の心の一面に鳥の聲を聴くゆとりのあることをうれしく思つた。

花によつて四季の移りかほりを感じすることは誰もすることであるが、雲の色や鳥の聲によつて四季の變化を感じてゆく人は割合にすくない。

わたくしは鳥の聲を聴くと阿彌陀經の中の「復次舍利弗。彼國常有種種奇妙雄色之鳥。云々」の句を思ひ出す。さらに阿彌陀經には「其土衆生聞是音已。皆悉念佛。念法。念僧。」と説かれ「舍利弗。汝勿謂此鳥實是罪報所生。所以者何。是諸衆鳥皆是阿彌陀佛欲令法音宣流。變化所作云々。」とある。鳥の

聲を聞けば自然に念佛念法念僧の心を生ぜしむるといふのである。否、小鳥の聲のみではない。微風にそよぐ草の葉も、梢も悉く念佛念法念僧の心を喚びさます。

故郷の家を焼亡した友人の心にかハヒバの聲カシラダカの聲も亦念佛念法念僧の心を喚び起したであらう。

小鳥の聲を聴いてゐる間だけはたしかに阿彌陀經に描かれてゐる佛國土を現實に感じないわけにはゆかぬ。

この穢土に於いてもかの佛國土に於けると同様に小鳥は無限なる實在の或るものを傳へてゐる。これは決して空想ではない。幻影でもない。

この現世の小鳥の聲に佛土の妙音を感じることのできない人は、恐らくやがて佛土に渡つて迦陵頻伽の聲を聴いても念佛念法念僧の心を發することはできないであらう。



今朝からの嵐で花は大方散つてしまふやうだ。

散つてゆく花の運命も知らぬかほに、梢には四十雀が囀つてゐる。散つてゆく花も春であり、囀る小鳥も春である。

昨日わたくしは多摩の田圃を歩いてゐて、偶然にも或る男の死を聴いた。つひ二三ヶ月前までその田圃で語つたことのある人である。

人は餘りに早く死ぬといふことは青年時代から知つてゐたことであるが、身近く死を感じるまでは、なかなか死といふものを遠い世界の出来事のやうに思つてゐた。

このごろはわたくしの心は餘りに死といふことのみに囚へられ過ぎてゐるやうである。

死を餘り遠く考へるのもいけないが、死を餘り身近く考へ過ぎるのもいけないやうに思ふ。一切は因果の導くまゝである。

庭に散つてゆく花をながめてゐると、その自然のまゝの姿に胸を打たれる。靜かに散るまゝに散つてゆく花、靜かに地上に置かるゝがまゝに散つてゆく花、靜かに土に朽ちてゆくまゝに散つてゆく花の悟りをうらやましく思ふ。

花の命は、三日か、いづれにして短いものである。人間の命に比ぶればまことに夢の間の命である。しかも花は何の悲しみもなく散つてゆく。ひらひらとおどるやうにさへ散つてゆく。

尊いさとりである。尊い姿である。

徒然草の言葉を藉るまでもなく百歳の後にはほとんど今生きて世に在る人といつては幾人も残らぬであらう。否、わたくしたちの年配になればその友人の中、十年の後二十年の後果して幾人か残るものがあらう。考へて見ると人生といふものも短い。花の命とさしたるけぢめはない。

かく考へて來ると、現世といふものはまつたく假の世である。死後億劫の世界が眞實の世であると考へなければならぬ。しかしこれも自分に都合のよい考へ方であるかも知れない。宿縁によつてめぐまれた人生の三十年であり、五十年である。宿縁によつてふたゝび死へ還らなければならぬとしたら、死の世界に對して何ものをも求めてはなるまい。一切はあなたまかせである。

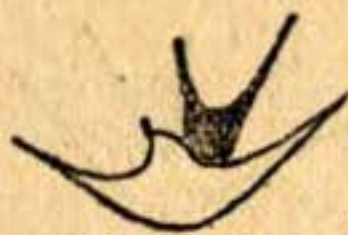
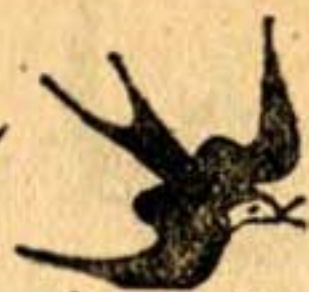
たゞ一人生まれて來て、現世に於いて妻となり、夫となり、親となり子となつたが、また死してたゞ一人とならなければならぬ。これも宿縁であれば歎つことなく死んで行かう。靜かに花の散るやうに。

×

ぼつかりと靜かな水の上に睡蓮が咲いてゐる。

人はそれを生と名づける。生と信じてゐる。

空を翔る燕は睡蓮の花を眺めて五月の幸福を感じるのであらう。



しかし水の上に浮かんだ睡蓮は燕にとつて何のかゝはりがあらう。そこに何の實在があらう。

美しい睡蓮の色、匂ひ、かゞやき、或ひは睡蓮をめぐるさゝなみ、微風……すべて人生の假相に過ぎない。

燕はふたゝび睡蓮の上を翔るであらう。しかし睡蓮は燕にとつて何のかゝはりがあらうぞ。

睡蓮は散つた。

人はそれを死と名づける。死と信じてゐる。

しかし風にも傷められず、雨にも散らされない永劫の睡蓮はその水面下に潜んでゐるではないか。

ふたゝび初夏がたづねて来る時、睡蓮は靜かに美しい花を水の面に泛がべる。

人はふたゝび睡蓮はよみがへつたと言ふ。よみがへつたと信じてゐる。

しかし睡蓮は數日にしてふたゝび散る。

生命とはそんなにもろいものであらうか。

靜かな水の底を探つて見るがいゝ。

そこには永劫の睡蓮が生きてゐるのではないか。

わたくしたちが生と考へてゐるものは多くの場合靜かな水の上の睡蓮に過ぎないのではないか。

水の上の睡蓮は假現、假相に過ぎない。

睡蓮の散つた後も、水の底深く潜んだ命は永劫に生きてゐる。

×

桐の花が咲き、うつぎの花の匂ふころとなつた。

柔かな草の葉を撫でて五月の微風が吹く。

立山や白山の雪をながめながら桐の花やうつぎの花につゝま

れた北陸の旅をつゞけてゐたころのことが思ひ出さるゝ。

あのころはわたくしの生活もめぐまれてゐた。

あれから十餘年の後、庭に面して孤坐しつゝ桐の花を眺めなければならぬなどと想像もしなかつたことであつた。

來年も來々年もそして永劫に桐の花は咲くであらう。

生きてゐる間、わたくしは孤坐して庭の桐の花を眺めるであらう。

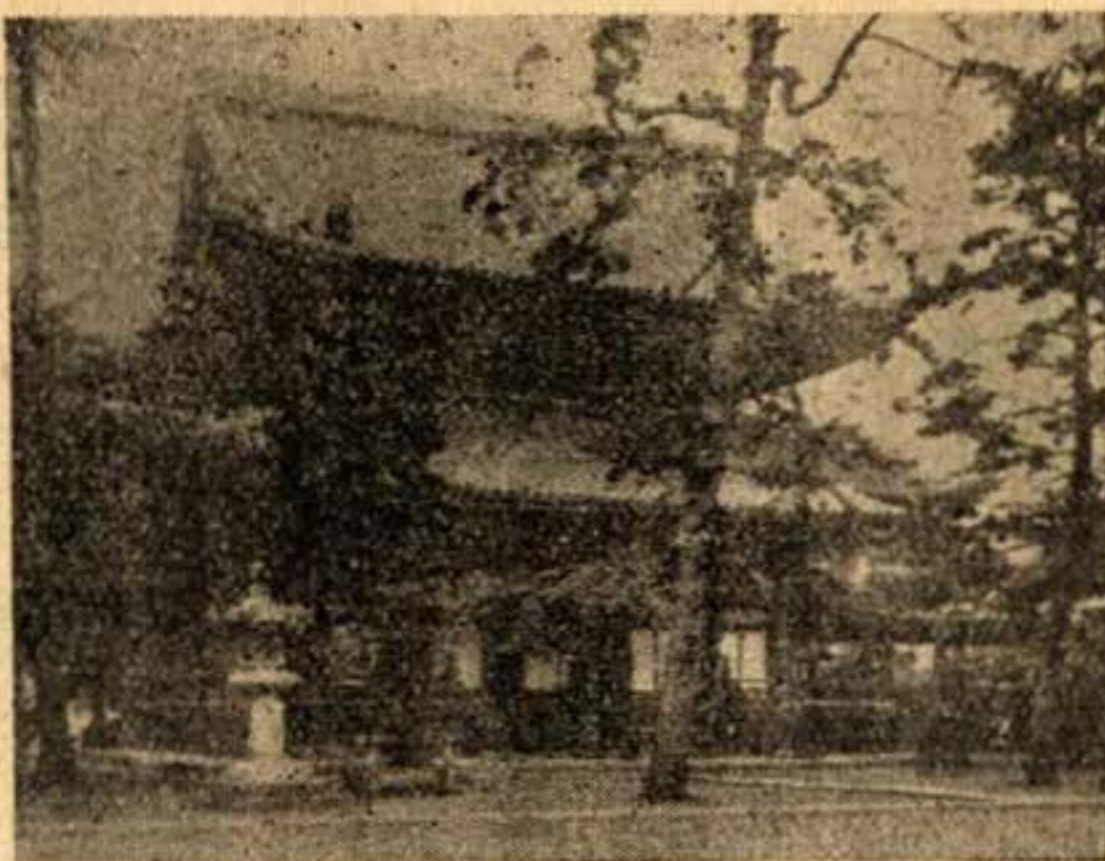
わたくしは死後を知らない。しかしこの地上にいろいろの美しい花の咲くかぎり、花を手折つて死者の冥福を祈る心をありがたく思ふ。

がたく思ふ。

佛土では諸島悉く佛のお言葉を語つてゐるであらう。

この世界ではいろいろの花もまた何かをさゝやいてゐる。

そのさゝやきは地下に眠つてゐる愛しき人々へわたくしたちの心をつたへるであらう。



— 春の旅 —

知恩院より法然院へ

醫學博士 和田 正 系

忙しい生活の暇を偷んで、今年の春も亦京都に行くことが出来た。唯一日。それも時間にすれば僅か十時間に過ぎぬのである。朝京都に着いて、その晩の夜行で歸つたのであるから。はる／＼京都迄出かけて行つて、餘りに惜しいとも思はれる。けれども私は、十二分に感謝せねばならない。

心の喜びは、長く滞在したとて、必ずしも多くはならない。否、時間が短かければこそ、感激は一層深いのである。満されないものにこそ、私はしみじみと恵みを感じなければならぬ筈であつた。

春は未だ寒かつた。例年ならば合着に着換へて、身も軽々と旅の出来る頃であるのに、今年はまだ冬仕度を据てることの出来ぬ陽氣である。

空は曇つて、久し振りに眺める東山の翠緑は、雨にでもなりさうな朝の空氣の中に、濕つてゐた。あの知恩院の雄大な三門を仰いで、私は石段の下に暫し佇んだのである。

る。この高い石段の上には、私が遙る／＼と安房の邊土から、おめにかゝりに來た瀧空上人が在すのである。私は胸騒ぎを落つけやうと、繩を片手にしたまゝ、二三度石疊の上を往き來した。早や參詣の團體もぼつ／＼来る。案内人のかん高い説明の聲も聞えて来るやうである。私は深い呼吸を一つすると、思ひ切つて石段を昇り始めた。大きな釜を控えた右手の休み所、長く續いた數石、豪壯を極めた御影堂、その前に立つ石燈籠といつに變らぬ懐しい伽藍の有様である。本堂の前に禮拜して、私は直ちに御廟へと急いだ。石階をいくつも昇つて行

く、御廟への道には人の影も見へなかつた。たゞしめつた空氣の中に、若葉が暗く垂れてゐるばかりであつた。もの寂びた勢、至堂から右折して、蓮華藏を昇れば御廟は直ぐ眼前にある。

私は拜殿の石段に立つて、靜かに袴を置き、外套をぬいだ。帽子をとつて、數珠を手にかけた。直立、合掌して暫らく、心を靜めやうとしたのである。御廟の暗い堂内には、たゞ一つ、ともし火が幽かにゆらめいてゐる。

しづかに、まなこをつぶつた。もう、そこには既にわが身はなかつた。

墨染の衣の源空上人は、その福々しい圓いお顔に、微笑をたゞえられて、

「よくこそ、遠い所を來て呉れた……」

と靜かに口を開かれるのであつた。上人

のこのお聲を聴きたいばかりに、私はたゞ一寸ちに吉水の庵をめざして、上つて來たのである。涙は頬を傳つて、ぼたりぼたりと拜殿の縁に落ちた。誰か上人を七百年前

の人とはいふ……。

「會者定離は常のならひ、今はじめたるにあらず、何ぞ深く歎かんや。宿願空しからずば同一蓮に坐せん。淨土の再會甚だ近きにあり。今の別れは暫しの悲み、春の夜の夢の如し。信謗ともに縁として、先に生れて後を導かん……」上人の低くさびたお聲は、ひれ伏した私の耳をひしひしと打つのであつた。

本堂に詣でゝは、細井、泰兩師に、御多忙中をいろいろ御世話になつた。内陣には諸襟の學生が唯一人、端坐し、瞑目して念佛を唱へて居た。戦死者の遺族か、或は又亡き父母の冥福を祈るのか。この廣大な堂内に、あたりを忘れて眞劍に合掌する、若き學生の姿は、強く強く私の心を打つたのである。

洛東鹿ヶ谷の法然院に着いたのは、春の日ざしも、早傾いた頃であつた。こゝは昔、

法然上人が草庵を結ばれて、別時念佛を修し給ひし靈蹟である。住蓮、安樂、松嶋、鈴蟲の物語りも床しく、その昔は、叡山と京洛との往還であつたと聞くさへなつかしい。爪先上りの道、まばらになつて來る家居。段々と靜かな山の中へ這入つて行く心持である。この靜寂な境地へ、自働車を乗り入れる心無きわざを自らとがめつゝも、時間の無いのは詮方なかつた。體氣身に泌みる樹立の間を上つて行けば、いつしか身心の清淨となつて行くのを覺える。つゝましく、風雅な山門を入れば、石疊を歩む靴の音にも、心せねばならぬ靜けさである。佻しい林泉にしばし心をとめて眺め入つた。この廣い天地に一人一人居ないのかと思はれる。おそろく本堂に上ると、眞正面の内陣に、思ひがけぬ大きな阿彌陀様が、嚴然と結跏趺坐して居られるのに驚かされた。それはこの堂宇に不釣合な位大きな丈六の佛様である。

庫裡へ廻つて案内を乞ふた。そこは「御

免下さい」などいふ現代語では相應しからぬ境地であつた。洋服では似合はない。どうしても雲水の姿で、「頼まう……」と腹の底から出す聲でなくてはならない。取次の坊さんは若かつたが、その言葉遣ひ、起居動作、すべて威厳肅重を極めて、床しき限りであつた。

佛殿より順次案内して頂く。持戒修道の道場とて、すべてに森嚴なる氣分溢れ、求道の心持が満ちて居る。本尊阿彌陀如來の優雅圓滿なる御相好、鏡の如く光れる直壇、その直壇に二十五菩薩を表徴して散したる二十五の生華、いぶしをかけたる如く底光りのする莊嚴、この内陣はまことに、普通のお寺と違つた、高く貴き様式と品格とを持つてゐる。

萬里小路僧正は態々書院に招じて下すつた。座に一人の先客あり。名刺を頂いて見れば井川定慶師である。僧正と云ひ、井川師と云ひ、豫て御高名を承つて居たので、この席は私にとつて實に願つても無き幸

であつた。僧正が私の住ぶ房州の事など、よく御承知になつて居られるのには驚いた。今日の記念にとてわざわざ井川師の著された選擇集を賜はつた。私は強いてお願ひして扉に御名號を書いて頂いたのである。井川師は又非常に喜ばれて、

昭和十四年三月廿七日法然院に於て

不思議の御縁を結ぶ

と書いて下すつた。久しく憧れてゐた法然院に詣で、然も僧正に御名號を書いて頂き、井川師に選擇集を頂くとは、實にどう考へても不思議な御縁に違ひない。御禮の言葉も無い有がたい御縁である。

もう、夕暮れも迫つて來た。惜しくはあるが、この感慨の深い法然院にお別れを告げねばならなかつた。

私はお寺が好きで、よく見て歩くが、この法然院ぐらゐ、心にしつくりしたお寺に詣でたことが無い。宏壯な、巨大な伽藍はいくらも有るが、それは要するに雲の上のもので、われ等庶民には餘りに縁遠い存在

でしかない。人をおどろかすのみで、本當にわが魂を抱いては呉れないやうな氣がする。法然院は伽藍としては固より小規模である。それは伽藍と云ふよりは寧ろ庵室である。眞に求道する者が、暫く世を遁れて修道するのに相應しい所である。それはわれ等凡俗にとつて、何といふ暖く、親しい、心のふる里であらう。たゞ／＼懐しいお寺であつた。

門を出で、左手の小高い墓地には、内蔵湖南博士や、近く物故せられた京都帝國大學總長濱田博士等のお墓がある。濱田總長はもともと日蓮宗の家柄との事であるが、特に此の地を自らの墓地として、生前から選ばれておかれたといふ。私も死んだら、この様な閑寂で、氣高くてそして懐しいお寺に、永遠に眠りたいと思つた。

私はその晩の夜行で、あはたゞしく歸途についたが、京都の友に送つた禮狀の終りに書き加へた。「濱田總長は何といふ良い墓地を選ばれたのであらう……」と。

金

小説
耳で救はれた雉



岸 大 雲
鈴木 金 平 畫

流霞三千里。

一

この國の詩人が、そんな風に咏ひました様に、その山の頂きから眺めると、杏や桃の花がまるで霞の向ふで狐火が燃えてでもゐるかの様に美しいのでございます。

おまけに柳の嫩芽、菜の花がそれを綴りまして、妖しいばかりに

綺麗に眼に泌みるのであります。
人間の世界。

そんなものは、そのはるか彼方の眼のとどかない邊に在るかの様な氣が致しまして。

それ程、下の眺めが美しく、又その山が人間ばなれのした寂かさだつたのでございます。

その中にうづくまる様に、一棟のお寺がございました。

お寺と云ふよりも、庵室とでも云つた方が、よさきうな誠にみすぼらしい姿でありました。勿論、里から詣る人としてはありません、いや、そんな所にお寺があるなどといふ事を、皆とつくに忘れはてゝゐたのでございませう。

ところが、いつの頃からか、一人の坊さまが突然とこのお寺に参りまして住居をしたのでございます。

何處が氣に入つたのか、旅の人間に氣やすさからでございませうか、食へる物さへ心配な、こんな所に住まふなんて、私達の様な凡人では到底考へられないのでございますが、その坊さまは、餘程人間の出来た方だつたに違ひありません。

それに私達が心配致します食物の事だつて、その坊さまにとつては、四季折々に自然に稔る木の實、草の實、それで充分だつたのでございませう。

世の中の、あらゆるもの、一つだつて無駄なものはないのでございますから。

二

ところが麓の里人の間に、こんな噂が誰口からとなくたち始めました。

それは人に依つてそれぞれ違ひましたが、とにかく、

(早朝か夕方に決まつて、見なれない坊さまを見た。)

と、こう云ふのでございます。

然も、はつきりと近くで見た者、勿論、口をきいた者なんか一人もありませんでしたが、そうしたところから(不思議な坊さま)と云ふ噂を生み、根も葉もない、くだらない事がからんで、波紋のひろがる様に、大きくなつて参つたのでございました。

その噂は何の刺戟とてないこの里人を怖しがらせ、興味を持たさせましたが、さうは長ふはございませんでした、と申しますのは、この(不思議な坊さま)と口をきいたと云ふ人間が出て來たのでございませう。

三

その日は、よいお天気ではございましたが、風も少し濕つぽくて、時々頭を掬める様に厚い雲がゆる／＼動いてをりました。

里人の龍蘇は田圃の仕事をやめて、朝から獵に出掛けました。龍蘇の獵の腕には里人の誰もが、かなひませんでしたし、自分自身もこれには確かな自信を持つてをつたのでございます。

が、その日は、あちらこちら山や谷と龍蘇自慢の獵場を歩きまはりましたが、目指す獲物の影さへも見つける事は出きませず、いら／＼して居りました。

黙々と流れる様に飛んでゐる雲にさへ無性に腹がたち、チエツと舌をうち乍ら、

(クソツ!! 一發、ぶつ放してくれようか)

と丁度、その時、頭上を飛んで來た雲めがけて、照準をきめた途端

(バタツ、タツタツ／＼)

といふ鋭い羽音が思ひがけなく身近くで致しました。(雉だ) そう感じたと同時に空をよぎる黒い影めがけて、

(ズドン!!)と、ぶつ放してゐました。

確かに手ごたへあつたと、走りよつて参りますと、一端傷ついて落ちた雉は、又もや飛びたちましたので龍蘇も、あとを追つかけたのでございます。

渾身の力を絞つて、飛びたち、又落ち、又飛びたち、そんな風にして、ずん／＼山奥へ入つたので龍蘇も、點々と落ちた血潮を手懸りに次第に奥へ入つて行つたのでございます。

まるで夢中だつたと申します。

四

龍蘇が一息に山の傾斜を馳け登つて、

(やれ／＼、もう捕へたぞ。)

思はずホツとして、そう思つた時でございました。眼の前に、この邊でついぞ今まで見かけた事のない小さなお寺を見つけまして、

(オヤツ)

と、狐にでも誑されたのではないかとふと、そう思つて、よく見たほした時、その庵室の縁に腰をかけた坊さまが、雉を抱いて一心に傷の手當をしてゐる姿が眼に入りました。

むしやくしやしてしてゐる時、漸く射落した獲物に、まるで翻弄される様な格構で追ひかけ／＼、やれ／＼と思つた途端に、驚に油揚げを、さらはれる様に、見知らぬ坊さまが雉を抱いてゐたものでございすから、龍蘇は相手が誰だか、そんな事は頓着なしに、づか／＼と近よつて囁鳴りました。

(オイツ!! 和尚、その雉は俺のもんだ、さあッ返へせ)

坊さまは、少しも耳に入らぬかの如く、雉の手當に夢中です。

龍蘇は一層油を注がれた様に怒りまして

(豊か、啞か!! そいつは俺のもんだ、返へせ)

握りしめた鐵砲をズシンと地面に突きたて、再び囁鳴りました。

龍蘇は少し氣味が悪くなつて、自分自身に威勢を付ける様に、囁鳴らずには居られなかつたのでございました。

坊さまは、手早く雉の手當をしまふと龍蘇の顔をふり仰いでニツコリ致しました。

(これで助かりますぞ。ワハハ……)

心の底から、こみ上げる様な笑聲で、身體をゆさぶり乍ら、雉を抱き上げました。

その笑聲は龍蘇の胸にジーンと沁み渡る様に響いたと申します。

全く氣勢を殺がれてしまつた龍蘇は、それでも

(いらぬおせつかいだ、その雉は俺が射落したんだ、さあ返して貰はふ。!)と、つめよつたのでございました。



(ほうー、あんたが撃つたのか、可哀想に。お汝さんにも、親兄弟があるぢやろ、この雉だつて親や、子があるのぢや、可哀想ぢや、逃してやりなされ。) 坊さまの聲は、優しく訓す様でした。(うるさい。俺は鳥を殺すのが稼業ぢや、折角、打つた獲物を横取されて、獵師が出来るかい) そり云ひ乍ら坊さまの膝に、小さくなつてゐる雉を、つかみ取ろりと致しました。

坊さまは、何とも云へない悲しい顔をなされまして、

(衲からお願ひする、こうして衲のところへ落ちて來たのも因縁ぢや、これを衲に下さらぬか。)

龍蘇は、いつもなら無造作に雉の一羽位、あげたでございませうが、この日は、どうしても、そんな素直な氣持になれなかつたのでございました。人間のあさはかな所でございませう。

(いや、俺も稼業ぢや、買ふてくれるなら文句は無い、渡しませう。)

坊さまは、黙つて大きく頷かれましたが、いきなり、右手を伸ばすや、龍蘇の腰に、はさんだ山刀の柄を握りしめ、サッ! と引抜くと、あつと云ふ間に自分の右の耳を、スッパリ切り落されました。

(ウッー)と聲をのんで棒立ちになつた龍蘇の前に、血潮も生々しい耳を差出し乍ら、落着いた口調で申されました。

(御覽の通り、衲は貧乏で一文のお金も無い。と云ふて、佛に仕

へる身で、眼の前に命を奪われ様としてゐる生物を見捨てる事は忍びないのぢや、どうか、この襖の耳で辛棒して下さらぬか。今は、口もきけず、頭がくらくくとして、龍蘇は大地に、身體を投出すと、深い感激、例へ様のない悔恨に打ちのめされて、ワッー、大聲をあげて泣き伏しました。

しばらくは、狂つた様にたゞ泣いたのでございました。やがて、
(坊さま、勘忍して下さりませ。勘忍して下さりませ、私は鳥を殺す位の事は、何とも思つて居りませんでした。

坊さま、あなたさまの心、それが、佛さまの御心と申すのでございませう。私は今、始めて殺生の怖しさがわかりました。自分の罪の深さがわかりましてございます。今日限り、殺生を止めます、きつと止めますでございます、どうぞお許し下さいませ。漸く、これだけの事を、聲を絞つて、とぎれ、とぎれ、嗚咽の内言つたのでございます。

(そうか。助けて下さるか、忝けない。)

ひよつこり、頭をさげて、さも嬉しそうに、こう申されました。

五

これから後といふものは、里人は、我も我もこの山頂の庵室にお詣りする様になつた事は申すまでもございません。

荒れはてた庭には、里人の心盡しになる、露虫の花も咲く様になりましたが、その頃には、この話が、町にまで傳はりまして、追々

とこの山を訪れる、都の人も増へて参りました。

が、誠に悲しい事には、又飄然と、かき消すやうに、坊さまの姿が見えなくなつてしまつたのでございます。

さあ大變、里人達は毎日の様に、その姿を求めたのでありましたが、そのまゝ、かきもく見えぬ様になりました。

大方、人足が繁くなるのに、居たゝまれず又、靜かな住居を求めて旅に出られたのでございませう。

えつ？坊さまの名前。

そうく、知舜とか云はれた様に、耳に残つてゐますが、これとて、誰が云ふとなく云ひ出したものでございませう。

私も傳へきゝに聞いたので、これだけより存じませんが、たゞ、毎年その頃には、眞赤な、まるで血の滴る様な紅い牡丹が咲いてゐると申します。長い話は終りました。

話手の老いた馬子も、私も、ホーツと深い息をつきました。

六

私はもう一昔も前になる南支那の旅の或る日、驢馬の背に揺られ乍ら、こんな話を聞いた様な氣がするのです。夢の様な氣もするのですが、その時、雨あがりの楊柳の枝に、たはむれてゐる、白蝶を何気なして見ましたが、今でも、この話を思ひ出すと決つて、はつきり眼の底にうかびますから、満更、夢でもなさそうです。

胡弓も愁しく啼いてゐますよ。耳がなるのかな。(終)



上海海軍 神田 一夫

大いなるものの力を知りてより進

み往く身に憂きこともなし

評 信仰の力によく艱苦を克服して大勇

猛心を發せしめる。敵艦沈没の中に在つては泰然として、剛毅沈着、事に當り得るは大いなる信仰が信念を會得したものに限るやうである。

島取市軍醫養所 田中正己

ひび切れし母の御手に纏まれたる

シャツのぬくもり我を泣かしむ

ふりかへりふりかへりては拜みた

り後姿の母に似し人

評 この作者は餘程心さまの凄直なやき

しい人であるらしい。戦地にあつて母君の贈物を受けて泣かれ、母の面影を持つ婦人を拜むなど純情の溢れた風はよむ人の心をうるほさずには置かない。

北海道 押野 尚秀

撞き出だす鐘の音重くこだまして

峰谷々は雪に暮れゆく

評 北海道の山地の冬は嚴かに寂しく切

ないものであらう。山寺の鐘の音さへ、響にひびかず荒涼たる雪景に對

して、一段の凄味をそへるやうな歌ひぶりである。

和歌山縣 奥村 映水

もやこむる港の中に鱸の音のゆる

く流るる春の夜半かな

中支派連軍 時岡 秀雄

敵襲の處れありとて彈藥倉身につ

けねむる中支那の夜

高崎陸軍病院 小中 勇一

一彈に首をうたれし軍曹の口うご

きつつ息絶えにけり

山形縣 佐藤 壽來

君おもふ寂しき我れを雪消えし沙

丘のぬくみひとりなぐさむ

京都市 永田 七郎

今日も又よき日なりきと床に入り

念佛申して明日をうれへず

京都市 黒野 智善

鳳凰堂昔も今もひとしきは薫りて

舞へる櫻花のみ

熊本陸軍病院 今井 馨

召されつつ戦に立たず病得て床に

臥す身の心寂しき

大阪市 鐵道 明道

晴れの日を待ちつつあれど如何せ

んみ櫓に召さん沙汰の來たらず

小樽市 中村 もん

攻まざる心にみ名を唱へつつ今日

を過ぎんと祈る此頃

福岡縣 三浦 壽子

いざ征きませみくにますらを國の

爲め君のみ櫓と散りませ男の子

三重縣 近藤 内海

一ひらの雲を浮べて青なり春晴れ

し日の芝生の上に

北海道 中村 茂樹

渦をまき岩にくづるゝ波やよしわ

がさびしさを告げて佇ずむ

北海道 色田 順佳

短夜もねざめ勝ちなり老いぬれば

心にかゝること多くして

嚴賀縣 二橋 定道

亡き友と遊びし昔おもひつつ泣き

て眺むる堤のさくら

千葉縣 安田 保治

春風の鏡が浦に吹き渡り曉雲の

かげうつり行く

靜岡縣 一向 山人

大君のみたてとなりしうはものの

碑は立ちにけり春の彼岸會

京都市 舟貝 利吉

友は今大別山に傷負ひて病む身寂しと書きておこしぬ

兵庫縣 森田 健之助

戦死せし子が植ゑ置きし桃の畑初

咲きを見る母の悲しき

東京市 三野 輪幸節

ひとひらの雲のうごかぬ麥畑つか

れたる眼に青くしみたり

大阪府 木全 澄子

しづかなるみ陵のもとぬかづきて

召されし兄の武運を祈る

東京市 三浦 順子

亡き父が好みしゆゑにこの春もた

てまつるかな彼岸の餅を

大阪市 渡邊 淨泉

師の妻は疲れしわれをいたはりて

のましめ給ふ熱き醍醐味

大阪市 松尾 いく子

好み住む山里なれど松の音はげし

き夜はねむれざりけり

新義舟 球 隆 盛

鐵路も軽く殘敵掃蕩に椰子の葉蔭

をすすむ皇軍

千葉縣 高橋 美也子

菜の花のつづく島の道行けばはる

かに見ゆるわが家の森

投稿規定

官製はがきに一回二首以内とし、「淨土」編輯部歌壇係あて送ること。



念 佛 者 は 強 し

伏 在 春 夫

この間さる小新聞でさる人が「時局と宗教」といふやうな題目を論じてゐるのを一讀して、参考のために保存して置いたのに、今は見當らないから、そのままを引用出来ないうが論旨は凡そ二段に分れて、先づ支那事變で社會的にも個人的にも憐みの多い刻下の情勢では民族に宗教の必要が痛感されてゐる筈と論じた點は賛成であつたが、それではどんな宗教に赴くべきかといふ第二段に到つて、先づ民族的に最も根ざしの深いものとして他力の宗旨を取り上げて置きながら、それがあきらめを旨とする消極的なものであるから、民族が積極的に動かうとしてゐるこの時勢には不向であると斷定して、今日は鎌倉武士の精神に影響して、日本武士道にも關係の深い禪宗などの如き積極的に強い宗教を求むべきであらうといふ風な結論に達してゐるもので

あつた。十人十説人各見るところを異にするとは申せ、この論者が一口に他力の宗旨をあきらめを旨とする消極的なものと見てしまつた皮相の見解は、あまりに概念的といふか、常識的といふか。念佛の精神に對する無智の無遠慮な曝露に驚くべきものを感じさせられた。他力の宗旨は果してそんなに弱弱しいものであらうか。自己の力ではいかにもすることが出来ない己の欲望に對して激しく徹底的に闘ひ抜いた體驗のある人だけが、自我を捨てて他力にすがる氣にもなるであらう。この意味で念佛者は決してさう懦弱な生活者ではない筈である。この上なく執拗な自我と四つに組んで見てどうにもならないのを悟つたので決してさうあつさりと弱くあきらめられるものではない。人間の自我に執する本能はさう淡泊なものでは



なく、とことんまで闘ひ抜いた人だけが僅にここに血路を見出して、最後にこれを捨てる氣になることの出来る類のものである。甚だ卑俗な例に墮するが、さまざまに手をつくして見て、もうどうにもいけないとしみじみ思ひ知つた上でなければつまらぬ浮氣な不實女ひとり捨てられるものではあるまい。私の場合相手は女ではない自我の欲だからである。一切の自我を抛擲することの困難はこれを克服することの困難に決してさう劣るものではない。現實の力の大きさを認め、この力に我々人間のいかに無力で小であるかを省ることの出来るのが、念佛者の智慧の第一であらう。さうして我々の生活が理想を持てば持つ程所詮は現實に對抗し得べきものではなく、一そそのなかに消化されて行つて生きるより外に道がないといふ決心は屠所にひかれて行く羊や牛のやうに果敢ない無意識なものではなく、人生の戦場に立ち向ふ者の勇敢な従順であらう。もしこれをも弱いといふならば參謀本部や指揮官や部隊長の命を擲じてこれに一命を托して戦ふ兵卒の勇ましき強さといふものは理解されないでしまふであらう。自分は他力の宗旨を決して弱いものとは思つてゐない。念佛者は人生の戦場の一兵卒の如く強いと云ひたいのである。昔の武士道は知ら

ず今日の我が兵は正に他力によつて強いのである。彼等は一切何が故にと問ふ事をせずただ至尊の軍旗の赴く所上官の命惟れ従ふのである。自他一如のこの精神こそ所謂全體主義の名で今日必要とせられてゐる精神であらう。

これが我が皇軍の精神であり、やがて亞細亞共同體形成の根底に缺くべからぬ精神ではあるまいか。己を空しうして眞理と現實とに奉仕することこそ、念佛者の精神であらう。

然らばこの意味では、今日民族に必要とされてゐる宗教は正に他力のものでなくてはなるまい。いや古來民族に深く根ざしたこの宗教精神が今日無自覺に花を開かせてゐるのかも知れないのである。それをいかにも無氣力な宗教精神のやうにいふ皮相に淺薄な論者を責める一方、自分はこの誤を多數に持たせてしまつたこの宗派に屬してゐる宗教家一般の猛省を促さなければならぬものの多いのを感じる。國民精神總動員の秋、卿等も正に奮起しなければならぬまい。徳川時代の御用宗旨として墮眠を貪つてゐるうちに卿等の宗旨は一般から弱々しいあきらめの教へのやうに誤解されてしまつたのである。猛省したまへ。そうして念佛したまへ。

善惡の彼岸

佐藤賢順

或る支部の例會のとき、私は、法然上人はありの儘の具體的な眞の人間の姿を、如實に眺められて、そこから出發なされた、といふ話をした。兎角人間は自らの姿を高く評價し勝ちであり、買取り勝ちであつて、法然上人以前の所謂舊佛教は、高く買はれ過ぎた人間を根柢とした爲に、其の上に築かれた構造全體が動搖し易いものとなつた。宗教の目的は、「人間の救ひ」が最初であり最後であるのに、誤つた人間認識から出發するものは、遂に最も重要なこの目的を放棄しなければならない。ほんとうの人間の姿は如何にあるか、この重要な反省に於いて、上人は現實の人間を「罪惡深重にして無智の者なり」として扱へられ、御自身をさへも——その頃人々から智慧第一の法然房と尊敬せられてゐた御自身をさへも、罪重く無智の者と自覺なさつた。この貴い反省こそ淨土宗への出發點であり、この反省に辿り着くことができなかったら、

淨土教への入信はなかなか困難であらう、などとも話した。

そして、法然上人は、この人間解釋に於いて「罪重く、無智の者」と必ず言葉を二つ重ねていらつしやるが、これは人間の一面をではなく、其の全面を扱えたものである。若し人間の働きを古くから使はれてゐる分け方のやうに知情意の三方面に分けるとすれば、「罪重く」とか「五逆十惡の」とか「身に一戒も持たず」とか言はれたのは、感情と意欲の、即ち行動的な實踐的な方面であるし、「黑白も知らざる童子の如く、是非も知らざる無智の者なり」とか「一文不知」とか言はれたのは、知識の、即ち知性的な理性的な方面である。現にあるが儘の人間を、行動的にも知性的にも、全體として眺められて、其の力の限界を認められたのである。言ひ換へれば、道徳的には何一つ満足な行爲は出來ず、一人の人間をさへ眞の慈悲心を以て愛し通すことさへ出來ず、如何に學問を究めたところで、知り得ること、究め得ることは、廣い海濱に限りなく散らばつてゐる貝殻の一つか二つ位のことにしか當らない。そのやうな人間が凡夫である。凡夫こそ淨土宗への出發點である、などとも話した。

そして更に、人間の身分とか社會的地位とかいふものは、かやうな果敢ない頼りない存在の上に築かれたものであるから、「我は烏帽子もきぬ法然房なり」とも言ひ、上より召されて二度まで殿

上に參られた時も、「殿上に參る可き機量には非ずと雖も」と、仰せられたことなども話した。

× × ×

それから話は私どもの日常生活のことに及んで、魚肉、家庭生活、酒などに就いて、法然上人はどうお考へであつたか、嚴格な戒律生活と念佛者との關係はどうであるか、などを話して、次のやうに述べた。

法然上人は右のやうな人間そのまゝの姿を眺められたのであるから、日常の修道生活の上にも、舊佛教の考へ方とは全く異つた方法をお取りになつた。舊佛教では人間の力を高く評價してゐた爲に戒定慧の三學が佛道修業の上での必須條件であつた。従つて日常生活にあつても、戒律嚴守の生活が先づ何よりの條件となつて、酒肉、女犯は勿論のこと、食べ物の細な點に至るまで難しい規定があつた。持齋と言つて、鳥獸魚肉はもとより、葱や韭や大蒜など、野菜でも刺戟性のものは食ふことを許されなかつた。而も食ふ回数や作法に就いても嚴重な定めがあつた。

然るに淨土教の實踐法は、これに比べると全く革命的であつた。或る時、人々が集まつて後世の事を話し合つて、魚を食はぬものこそ往生ができるとか、いや、魚を食ふものこそ往生ができるのだとか、論じ合つてゐるのを上人がお聞きになつて、

魚くふもの往生をせんには鵜ぞせんずる、魚くはぬものせんには猿ぞせんずる。くふにもよらず、くはぬにもよらず、たゞ念佛申すもの往生はするとぞ、源空はしりたり。

と仰せられた。是は佛道修業の上では誠に革命的な宣言であつて舊佛教の側からは、淨土教の日常生活は佛教の生活ではないとさへ見えたであらう。然し目的が往生といふ一大事に懸つてさへるれば、日常の些細な事柄の一々は問はない。その目的の成就の爲に障害となるべきものは退けられ、この成就に多少とも役立つ事は總て良しとせられる。これが淨土教の日常生活である。

かやうに日常生活の態度が變つたのは、先に述べたやうに、人間が見直されると共に、それに従つて、佛道修業の目的が變つたのによるのである。人間には戒とか定とか慧とかの困難な修業に堪え得る力があると過信してゐるから、成佛が直接の目的となるのであるけれども、この信頼が動搖してくれば、成佛はもう直接の目的ではなくなつて、往生といふ理想がこれに代るやうになる。私はそんなやうに話を進めた。

× × ×

話はそれから色々の方面に渡つたのであるが、今はそれを書かうとするのではない。一通り話が終つてから、座談を交へて、お互に腹藏なく感想や疑問をさらけ出すのがこの會の毎回の慣はし

となつてゐるので、其の夜もめいめいが意見を出した。

A氏はかう言ふのである。

『法然上人が、現に在るがまゝの人間の救ひといふことを、何よりも第一となされたことは、かねがね伺つてゐるので、有難いと思つてをりますが、實は、これは家庭的の事ですが、困つたことがあるのです。私の家では、母が大變やかましくて、佛事には總べて精進で、これは仕方がないとして、毎月諸々の命日といふ日は何日でも朝から精進です。それが、私の家は古い家で、佛様も澤山あるものですから、命日が毎日續くことがあります。三日も四日も續くことがあります。私ども大人は良いとして、子供も三人程居りますので、これには困ります。家で頂く御飯は精進でも良いでせうけれど、お辨當まで精進といふわけには、なかなかゆきません。この邊では野菜の方が高くて、魚が安いのが普通ですから、毎日の經濟から言つても精進など出来ることではないのです。今のお話を伺つて、精進にすることが大して大切なことではないとすれば、止めてしまつても良いでせうか』

誠に尤もな意見である。然し私は次のやうにお答へした。精進の生活といふのは辛いことに相違ない、けれどもそれが出来るならばこんな結構なことはない。法然上人も決して持戒の生活よりは無戒の方が良いとせられたわけではなく、持戒に越したことは

ないのであるけれども、現實にそれが守れないといふのであれば致し方がない。却つてそれに拘泥して大切な目的を忘れることになつてはいけなからと考へられたのである。また、事實、精進の日を定めて置けば、先祖を思ひ、人間の一大事を思ひなどする機會も、度々興へられるわけであるから、種々の點で、念佛のみにこそなれ、邪魔になることはないでせう。折角、續けて居られることを、今廢止することはないでせう——。

或る人が法然上人に、持戒の行者が數少く念佛を申すのと、破戒の行人が數多く念佛を申すのと、いづれが良いでせうかとお尋ねした。上人は坐つてゐる疊を指さして、

「この疊があるからこそ破れてゐるとか破れてゐないとか言へるのだが、もし疊が無かつたならば、何とも言ひようがあるまい。末法の世には持戒もなく破戒もない。たゞ名前だけの比丘があるだけだと傳教大師も末法燈明記の中に書いてをられる。それなのになぜ持戒破戒を論ずるのか。彌陀の本願はたゞの凡夫の爲に發し給へる本願であるから、いそぎいそぎ名號を稱へるがよい」とお答へなさつた。私はこの御法語の意味を詳しく紹介した。

すると次にB氏が疑問を提出した。

『人間は罪惡深重にして無智のものだといふのが眞の姿であるこ

とに氣着かれた上人は偉大であると思ひますが、誰しも多少でも道德的に向上して、悪いことを退け善い行を進めてゆかうとする意志を持つてゐます。身を慎み行を修めて向上しようとする意志が少しもない惡人でも、其の儘に救はれるとすれば、善い事をするのが何だか馬鹿らしくなります。結局、どちらでも救はれるといふなら、極端に言へば、悪い事をしてゐる方が得だといふことになりはしませんか」

これも亦、誠に尤な質問で、所々の會合でよく出る質疑であるこれ對しても、私は寧ろ、私見によつてお答へするよりは、御法語によるのが良いと思つた。

或る人がB氏そのまゝのことを上人にお尋ねした。

「如來の本願は惡人をも嫌はないからといつて、好んで悪い行をするのは、よろしいことでせうか」

「如來は惡人をも捨て給はぬけれども、好んで惡を作るのは佛の弟子ではない。佛法に惡を制しないものは一つとしてない。それなのに、悪い行を止めることの出来ないものは、念佛して其の罪を滅せよと勸めてゐるのである。自分が堪えられなくて惡を犯して、本願は惡人をも嫌ひ給はずなど、佛に科か懸け奉ることには大きな誤である。自分が悪い行を止めることができなかったらば、如來に何卒慈悲を捨て給はずして、この罪を滅して迎へ給へ

と申すがよい。たゞ罪を作つてもよいなどといふことは、佛教では決して言はないところである」

これが上人のお答であつた。

然し私は、この問題と關聯したもう一つの御法語を更に意義深く拜讀するのである。或る時、次のやうな問がなされた。

「惡を止め善を行はうとして念佛申すのと、たゞ本願を頼むばかりにて念佛申すのと、何れがよろしいでせうか」

上人のお答——「廢惡修善は、諸佛の通戒なり。しかれども、當世のわれらは、みなそれには背きたる身なれば、たゞひとへに別意弘願のむねを深く信じて、名號を稱へさせ給はんに過ぎ候まじ。有智無智、持戒破戒をきらはず、阿彌陀ほとけは來迎し給ふことにて候なり、御意え候へ。」

この御法語に於いては、先の御法語に於けるよりは、善と惡とに就いての、廣く遠かなる展望が開けてゐる。私どもは、惡と言へば、餘りに道德的な社會的な、現世的な惡だけを考へ過ぎてはゐなかつたか。善と惡とを何によつて區別しようとしたであらうか。惡には道德的な意味と宗教的な意味とがあることを見落しはしなかつたか。宗教的に見れば、善も亦、惡であることを忘れてはゐなかつたか。一體、善とか惡とかは何であらう。(未完)



晴れの結婚日を旬日の前にひかへた文子は、何やかと、その準備に忙しく、心にも、喜びと不安とが交錯して、何となく落ちつか

なかつた。
「随分、色んなものを飾つたね。」
文子の後について、彼女の居間に這入つて

トンコ

念佛結婚

藥師寺 章
齋 藤 清畫

來た兄の賢一は、あたりを見廻しながら、驚嘆の聲を放つた。

その部屋一杯には、タンスだの三面鏡だのと、結婚の色んな調度品が、未來の彼女の幸福を象徴するかのやうに、華やかに装れてゐた。京都の大學にゐる兄は、日曜を利用して歸つて來たのだつた。

「全く絢爛たる有様だね。この中にあると、お前は、幸福の女王さまのやうに見えるよ、」
「まあ。」

文子は、てれるやうに兄の顔を見上げた。
「ところで、この中の品物、みんなスフかい、人絹かい。」

「勿論兩方だわ。」

「着物は、國策に添ふて結構だが、心まで混織ぢやいけないぜ。」

賢一は、兄らしく一寸たしなめた。

「兎に角お目出たう。」

「とにかくではひどいわ。それより、何を祝つて下さるのよ」

「早速とお祝の請求か。お前も心臓が強くなつたね。要心しないと、田中さんに嫌はれま

すよ。」
文子は返事の代りに、ぐつと兄を睨みつけた。

「そら、すばらしいものを祝つてやるよ。」

賢一は、細長くハترون紙で包んだものを渡した。

「何？」

「さあ、何だらう。」

「時計ぢや勿論なさそうだし、ペラソルか知ら。」

文子は、よろこびに一杯溢れながら、包を解き初めた。

その時丁度、その部屋に這入つて来た両親の四つの目も、それに注がれた。

ところが、中から現れたのは、全く思ひもよらぬものであつた。

「アッ」

と、三人は、只あつけにとられて、互に顔を見合せるばかりだつた。

驚くも道理、それは京都のさる本山の法主の認めた墨痕あざやかなる大字の名號の軸物だつたからである。

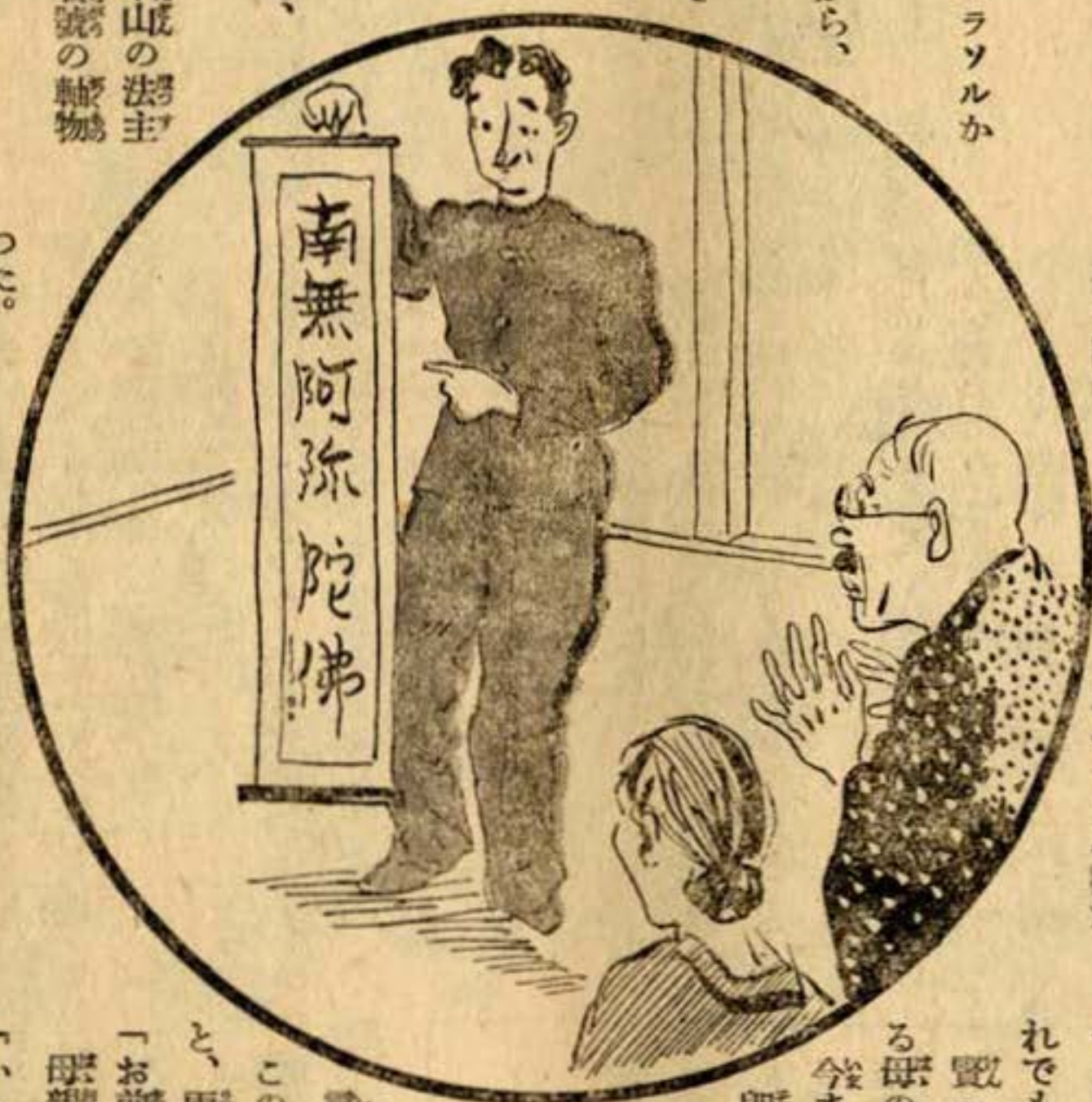
父親の顔は、見る／＼中に變つた。

「賢一、何を冗談するんぢや。」

「お前、文子の結婚が不服で、こんな事をするんかい。」

母の聲は、

早やうるみ聲だ



つた。

「いゝえ、心から祝福してゐます。」

「それなら、何故、こんな馬鹿な眞似をする

んだ。」

激怒した父は、眞赤になつて呶鳴つ。

「目出度い結婚のお祝ひにお念佛なんて、それでもお前、兄さんかい。」

賢一のやり方を、不可解のものとしてなじる母の目には尖つたものがたまつてゐた。

今までのなやかさに似ず、部屋一杯一瞬即發の重くるしい危機がみなぎつたかのやうたつた。

「オホホ……お父さんやお母さんは、全く時代遅れなのね。」

その時突然突拍子もなく、さも面白くてたまらないものゝやうに、笑つて

言つたのは文子だつた。

この異外な態度に氣が狂つたのではないかと、両親は、け／＼の眼を見張つた。

「お前、どうかしてはゐないかい？」

母親は、心配さうに訊いた。

「いゝえ。」

「こんな縁起の悪いものを、冗談にも程がある。」

「ちつとも縁起なんか悪くはないわよ。却つてめでたい位だわ。」

「まあコノ娘は。」

母親は、文子の言葉にあきれて眺めた。

「文子、何を無茶を言ふんだ。何が目出度いんだ。馬鹿な事を言ひなさんな。」

「あら、お父さんも、名號の有り難い意味を御存じないのね。」

「それや知つてゐるよ、而し場合が違ふ。」

「ほんとうの有り難い意味を御存じないから、御立腹されるんだわ。」

「勝手になさい。賢一、早く、そんなものを片付けてしまひなさい。」

ニガリ切つた父は命じた。

「駄目よ、お父さん。そんなに怒つちや。まるで、彦根の家老のやうだわ。」

「何が彦根の家老だ。」

「今語すわよ。その理由。」

昔彦根城主が正月のお茶の會に、家寶の阿彌陀釜で湯をたてようとした時、家老が聞いて、おめでたい席に飛んでもない縁起の悪い

ものをといさめ止めようとしたが、城主は、鶴は千年、龜は萬年と云ふが、それよりもつと命の長い、無限である無量壽を意味する阿彌陀の方が、どれほど目出度か知れないと教へて、家老の迷を開いた事を語つた。

文子は尙も言葉をつゞけて、

「そればかりではないわよ、お念佛は、この世を清く明るく正しく生きるために必要なものよ。生活の力を興へるものよ。結婚したら、家に居る時と違つて、どんな苦しい時が来るかも知れないわ。そんな時、私を守つて下さるのは彌陀さまだけだわ。」

兩親は文子の言葉を、何かあたらしい眞理を聞く時のやうに、驚きと感心さに背いてゐた。

「だからお名號こそ、人生をいつも朗らかに明るく暮すために必要な心の太陽よ、」

「……うむ、成程、さう考へれば、これは結構なものやうだね。この年になつて、初めて念佛の有り難さが分つたよ。」

「お母さんは、随分お寺参りをされますが、

いつも何を聞いていらつしやるの。」

文子は笑ひながら皮肉つて云つた。

「大方居睡に行くんでせう。」

賢一は、まぜつかへした。

「アハハハ……」

「オホホ……」

爆笑がどつと部屋一杯に起つた。夕陽が部屋一つばいにさし込んで來た。(をはり)

支部例會御通知

良忠寺支部例會

○五月六日午後六時より

○横濱市鶴見區矢向町 良忠寺

(南部線尻手下車)

貞恭婦人會支部例會

○五月六日午後一時

○東京市芝區芝公園明照會館樓上

(市電芝園橋又ハ増上寺前下車、ブル隣)

どなたでも無料御參會出來ます。

大羽比夫羅画

非常時潮干狩

1

さて、獲物はないかな



大漁だ
エツサ、エツサ

2



3

このブリキ
罐、まとめ
ていくらだ？

これだけ
とるの海で一日か！つたのよ！



江戸の法然上人

松本豊松

○御開帳續く

延享四丁卯年、四月一日から二十日まで、

芝の三田寺町林泉寺で、奥州賀美郡眞似村、往生寺の圓光大師御影の開帳があつた。是

をキツカケに寶曆年間には相當引續いた。

先づ寶曆二壬申年四月一日から、本所

回向院で、京都知恩院安置の圓光大師利劔の名號の開帳があつた。

同四甲戌年二月には、本所回向院で、奥

州會津高嶺寺の圓光大師、開帳。

同五年乙亥年四月一日からは、同じく回

向院で、小金東漸寺の圓光大師、開帳。

同十庚辰年二月二十日から、是も同じ

く回向院で、美濃國稻岡誕生寺の圓光大師、開帳。(増訂武江年表)

以上が張行されてゐる。本所回向院はあ

る意味では、江戸の開帳會館? ともいへ

る存在ではあるが、斯く引續いて同じ本尊

によるものは珍らしい部類にはいる。是は

勿論毎回參詣が多かつたことを物語するもの

である。そして、その原因は何處にあつた

かといへば、上人の五百五十年忌をひかへ

てゐたこともあらうが、誰か特別に宗門の

ために活躍してゐた才人があつたのではな

いかと想像される。

さて、翌寶曆十一辛巳年は、上人の五百

五十年忌で、命日の正月廿五日は、京都で

も江戸でも盛大な法會が催された。

次の明和年代には、開帳に關する記事が見當らぬ。

安永年代には、三甲午年六月、二ヶ所で同時に開帳があつた。一つは西門跡御雛殿所で、信州埴科郡白鳥山康樂寺安置、圓光大師御影及び、親鸞上人木像の開帳。一つは二本榎の廣丘院で、仙臺往生寺安置、變牛濟度圓光大師の開帳であつた。

○二十五箇所巡拜

尚、此の年代には誰によつて撰されたのか不明であるが、江戸に「圓光大師遺蹟寫廿五箇所巡拜」が出来た。是は宗門史の上の一齣をなすに十分な事實であると思ふ。

巡拜といふことは、江戸の善男善女の盛んに行つたもので、例へば、三十三ヶ所觀世音參六地藏詣四十八ヶ所地藏參八十八ヶ所弘法大師參十ヶ所祖師參圓庵三拾遺、妙見宮不動尊金毘羅權現百社參辨財天百社參東照宮巡拜など頗る多く、ことに觀世音參などは五六種の異つたものがあり、一々あ

げたら非常な数になるので、遠く西國や四國へ出かけなくても、お膝元で巡拜出来るやうな仕組になつてゐた。上人の遺跡を寫した巡拜も實は此の一つだが、二十五ヶ所夫々に御詠歌も出來て、相當力が入れられてゐたことか分る。巡拜の日は正月廿四日、廿五日を原則として、二日間に詣でる事となつてゐた。そして、その兩日には大分參詣の人が出て、近年まで續いたといはれる。現在でも行はれてゐるのではなからうか。

「東都歳事記」によると、

壹 番 芝増上寺山下谷妙定院 攝津

勝屋寺寫

しばの戸にあけくれかゝる白雲を、い
つむらさきの色にみなさん

貳 番 赤羽心光院 讃岐小杉庄法然

寺寫

おぼつかなたれかいでけんこまつと
は、雲をさゝふるたかまつのをえだ

參 番 芝増上寺山内西蓮社 大阪一

心寺曰想觀舊跡寫

あみだ佛といふより外はつの國の、な
にはの事もしかありぬべし

四 番 本芝西應寺 南都大佛念佛所

寫

さへられぬひかりもあるをおしなべ
て、へだてがほなる朝がすみかな

五 番 三田下寺町林泉寺 大和天の

香久山法然寺寫

かぐ山やふもとの寺はせまけれど、た
かきみのりをときてひろめん

六 番 高輪法藏寺 播磨高砂十輪寺

寫

うまれてはまつおもひてん故郷に、ち
ぎりしとものふかきまことを

七 番 品川新宿法禪寺 攝津尼が崎

如來院寫

みとくちと心のほかのみだなれば、わ
れをはなれてとなへこそすれ

八 番 目黒祐天寺 京都黒谷金戒光

明寺寫

いけの水ひとの心にとりけり。にこ
りすむことさためなければ

九 番 同長泉律院 山城清水寺院寫

きよ水のたきへまいればおのづから、
げんせあんおんごしやうごくらく

十 番 西の窪天德寺 京都今出川淨

華院寫

ゆきのうちにほとけのみなを唱ふれ
ばつもれる罪もやがてきえぬる

十一番 赤坂新町專修寺 伏見源空寺

寫

ひとこゑもなむあみだ佛といふ人の、
はちすのうへにのぼらぬはなし

十二番 四谷新宿太宗寺 京都大原勝

林寺寫

あみだ佛そむる心のいろに出ば、秋の
こずみのたぐひならまし

十三番 小石川傳通院 京都粟生野光

明寺寫

つゆのみはこゝかしこにてきえぬと
も、心はおなじはなのうてなぞ

十五番 同所無量寺 紀伊大川村堂思

講寺寫

ごくらくもかくやあらましあらたの
し、いまらばやななむあみだ佛

十五番 坂本入谷長松寺 京都清瀧川

月輪寺寫

月かげのいたらぬさとはなければども、
ながむる人のこゝろにぞすむ

十六番 下谷幡隨意院 京都吉田百萬

遍知思寺寫

われはたゝほとけにいつかあふひぐさ
こゝろのつまにうけぬ日ぞなき

十七番 同源空寺 美作朽社村誕生寺

寫

ふたはたのあまくだりますむくの木

は、よゝにくちせぬのりのしのなり
十八番 淺草寺町稱往院 京都五條寺

町法然寺寫

たゝたのめよろづのつみは深くとも、
わがほんがんのあらんかぎりは

十九番 同誓願寺 京都誓願寺寫

ごくらくははるけきほどときゝしか
ど、つとめていたるところなりけり

二十番 同新堀壽松院 京都小松谷正

林寺寫

ちとせふるこまつのもとをすみかに
て、むりやうじゆぶつのむかへをぞま
つ

廿一番 新島越寺町玉蓮院 伊勢山田

欣淨寺寫

やはらぐるかみのひかりのかげみち
て、あきにはあらぬみじかよの月

廿二番 本所靈山寺 京都嵯峨二尊院

寫

あしびきのやまどりのをのしだりを
の、ながくしよをいのるこの寺

廿三番 同回向院 大阪天王寺念佛堂

寫

あみだ佛とこゝろをにしにうつせみ
の、もぬけはてたるこゑぞすずしき

卅四番 深川法禪寺 大和當摩奥院往

生院寫

あみだ佛とまふすばかりをつとめに
て、じやうどのしやうごん見るべかり
ける

廿五番 同靈岸寺 京都東山華頂山智

思教院寫

くさも木もかれたる野べにたゞひと
り、まろのみのこるみだのほんぐわん
とある。どの巡拜にも一番から巡拜せず、
早廻りの方法があるもので、交通機關に不
便な當時、殊に歩くのも目的とされたので、
當然出来る方法だが、此の二十五ヶ所にも
此の方法があつたさうだ。併し、一番から
巡拜すれば、十二番で初日は打上げ、翌日
小石川から下町をまはつたものと聞いてゐ
る。

○三度目の大師謚號

文化八辛未年正月、上人に三度目の大師
謚號の沙汰があつた。光格天皇の御代で、
徳川將軍は家齊であつた。此の年は恰も上
人の六百年忌であり、「海録」に
法然上人六百回忌（知恩院）に當りて、
上より謚號を給はれり、宣命之寫

勅、朕聞、道不三自弘、弘必由人、物不三
自覺、覺必待師、緬惟、故吉水、源空和
尚少在三教、博學之名夙彰、老居吉水、
專行之德彌高、戒珠明朗隨和、其光一懸
刀銳利于莫愧其銳、二尊之大悲揚三師
棟、優劣於正雜體、二尊之大悲揚三師
之微猷、於是若善若惡、掛二域而長別三
無覺無愚、望鼎邦以高馳、貴賤歸嚮、
化風扇於一時、緇素信服、慈澤流於百
世、嗚呼如三如尚、其弘道之哲人、覺物之
良師乎、三朝先皇既賜三佳號、以誰盛德、
茲丁三六回忌之忌辰、朕亦更加以弘覺大
師之謚、

文化八甲正年十八日

と、勅書を載せてゐる。江戸時代になつて、
三度大師號を謚された上人の光榮、宗門
の榮譽は是にすぎたものはない。ところで
「増訂武江年表」は、文久元年辛酉年の項
で、

正月廿五日、圓光大師去年六百五十年御
忌當り、去年より淨家寺院追々に法會を
設く、弘覺大師と謚號賜る、
と記してゐる。勅書の寫に間違があらうと
は思へないので、此の説は誤りであらうと

考へる。そこで、私は弘覺大師證號は文化八年の方をとつておく。

文久元年には四月一日から十八日まで、小石川西岸寺に、圓光大師鏡御影の開帳があつた。

○宗門及び信徒

大分記録的のものゝみ記して、頗る長く

◇淨き友の會◇

◇例會だより◇

「淨き友の會」の例會は左記の如く催されたが、參會者は毎回十五六名乃至二十人位にて、極く落付いた會合であつた。

第十九回 三月廿六日、講話「般若心經終講」

第二十回 四月二日、講話「阿彌陀經講義」(一)阿彌陀經解題

第廿一回 四月十六日、講話「阿彌陀經

なつたから、一先づ此の邊で筆をおくが、元祿年間に圓光大師證號があつて、僅かな間に更に二度も證號の光榮に浴してゐることは、佛教界としても稀有のことであらう。勿論此の事實は皇恩無窮による事、申すも畏れ多い。そして、上人の高徳の然らしめたる事にもちがいない。併し、江戸時代の宗門及び信徒について、「即事考」が、

講話(二)證信序及び發起序について

愈々四月より阿彌陀經の講話が始まつた

先づ譯者たる姚秦三藏法師鳩摩羅什の事蹟から始めて、開卷第一の序分、六成就の事が済んだ。次回からは十六大弟子等の事蹟に就て多く語られる筈である。賓頭盧尊者等の羅漢さま達や文殊師利等の菩薩方の話は、きつとその人柄がなつかしまれることであらう。第五三頁案内御參照の上奮つて御參會下さい。

東照宮は御先祖御代々三河國にすませ給ひて、淨土の眞門を仰がす、御宗門と定させ給ひしかば、他宗に勝れて興隆し、念佛の一行を末代の衆生に修せさせしめんおぼしめし、慶通五年關ヶ原に凶徒を御追伐の後、一天をはらひて清め、上洛の御時、知思院滿譽大僧正に此事をはからせ、上意の趣には、凡天台眞言の他宗に超過せるは、宮門跡ましますが故に、代々將軍たるものといへども是を仰せられ、淨土門に生れ、將に四海の主たるべき身なり、殊に當山には我祖親忠義庶子超譽住職あり、故に帝都にての菩提所と定め云々

と徳川家との密接な關係と、その信仰を記して居り、更に諸宗門の分布を示し、公家衆には淨土宗最も多く、諸大名には禪宗に於いて淨土宗最も多く、清華のうち大徳寺、大徳寺門、西園寺の諸卿は淨土宗であるなど話してゐるところも、記憶のうちに於いて此の事を見てよいのではないかと思ふ。

(をはり)

談美後銃

遺骨の出征



ほの暗い、須
彌壇、蠟燭のみ灯

が、をこそかにかがや
き、安置された、眞新しい位
障の上を、線香の煙が、ユラ／＼
とかすめて行く。

カーン！

鐘の音がして、導師の讀經が、やがておは
ると、

「では、お墓の方へ、——これから、ご納骨
をいたします」

「はい。ありがとうございます」

母親の鈴木君のふは、親
戚の者達と、立ち上つた。

——が、これで、正雄の骨も、
土に還るのか、思ふと、さすがに、

止め度もなく涙が頬をながれる。

正雄は、腹膜炎で亡くなり、今日が三十五
日忌であつた。かつての満洲事變には、歩兵
上等兵として出征し、幾多の輝かしい武功を
樹て、こんどの支那事變が起きると、もう一
度、大君のため、國家のために、この身を捧
げるのだといつて、再度の召集狀を、どんな
に待ち望んでゐたことか。

しかし、召集狀は、つひに來なかつたばか
りか、自分は病にたはれ、その死の床で、親
友松山茂が、やはり歩兵上等兵として勇躍應
召して行く姿を、見送らねばならなかつたの
である。

「戸板に乗つてでも、出征したい——」

松山茂の最後の見舞をうけたとき、正雄は
その手をしっかりと握つて、泣いてさういつ
た。——松山茂は、おもはず、感涙にむせび

「鈴木君、安心しろ、君と二人分の働きをし
てくるから」

そして「鈴木春雄君、萬歳」と、大書した
旗をかついで、壯途に上つたほどであつた。

母ののぶは、わが子ながら、かうした正雄
の愛國心には、心から泣けた。

（このうへは、どんな眞似をしてでも、正雄
をもう一度もとの體にして、お國のお役に立
てるやうにしてやらねば……）

不眠不休の看護も、しかし、それが壽命と
いふのか、それから數日して、正雄は世を去
つてしまつたのである。——

が、それから數日して、今度は、兄の春信
に、召集の令がもたらされた。

「お母アさん、喜んでください——正雄の代
りをする事が出来ます！」

と、春信も、いたくよろこび、

「正雄、安心しろ。このとほり俺に召集令が
きたから、きつとお前の代りに、充分働いて
くるよ！」

佛壇に、線香を上げて、正雄にさう告げた

のであつた。そして、旗の波におくられて、
元氣で出發して行つたのだつたが、いま、鈴
木家累代の墓の前で、導師による、手厚い、
正雄の納骨式に列しながら、母ののぶは、こ
れらのことを、期せずして想ひ出し、
(正雄、ご免よ——私の看護が足りなかつた
ばかりに、お前をこんな姿にし、お國の爲に
つくさうとする、お前の心を無にしてしまつ
て……)

さめくと、再び涙を新にした。そこに誰
もゐなかつたら、墓にとり纏つて、聲をあげ
て泣いたであらう。

天にかはりて不義をうつ
忠勇無双のわが兵は
歡呼の聲におくられて

……

折しも、出征兵をおくる、熱誠こめた人々
の歌聲が、かなしくも、街から、かすかに流
れてきた。

「は、はい……有難いお言葉で、夢から醒め
たやうな氣がいたします」

「では、よくお分りだなー」

「はい。よく分りました。正雄の
身體は亡びても、靈まで滅びたのではないと
うかがつて、スツカリ安心いたしました。私
はもう泣きません……」

と、今までの泣顔はどこへやら、持ち前の
キリツとした顔になつてさういつたのは、鈴
木のぶ。

——かの女は、さつき、正雄の納骨式がを
はつても、墓の前に泣きぬれて、ひとり
いつまでも、立ち去らうとしない姿

を、この寺の和尚に見咎められ、
やさしく言葉かけられるま

まに、そのわけを語つ

たのだつた。

和尚は、そ

れをきく

と、

かの女を、庫裡に招じ入れて、言葉しづ
かに、諄々と佛の教を説ききかせた
のであつた。

生者必滅
會者定離

これは自然の法
眼で、曲げる
ことはで
きな



いけれども、しかし、人の靈まで失はれたのではない。そして肉體を離れた靈は、み佛の導きによつて、未來永劫生きてゐる。——だから人間の死は、あながち悲しむべきでなくかへつて、み佛のもとに行かれたことを、喜ぶべきである。

かうした教へは、のぶの心を、揺り動かし、た。そして、悲しみの底から、ほの／＼とした。明るさが蘇生り、心は次第に、平靜をとり戻して行つたのだつた。

「では、和尚さま、正雄は決して、この世から居なくなつたわけではございませんね？」
のぶは、やがて、何事か思案するやうにいつた。

「さうぢや——決してこの世から、消えたのではありません。りつばに、生命を超越して生きて居られる……」

「ありがたうございます。——では、生前、あれほど、戦争に行きたいと申して居りましたのですから、その志を生かして、戦地で働かしてやりたいと存じます」

「うむ、なるほど——」

「ついでには、正雄の骨を分骨して、兄の信春と一緒に、出征させてやりたいと思ひます。

兄は今日か明日、戦地へ出發するとのことである。きる事なら、その兄に、正雄の骨を持たせてやれば、正雄は兄と一緒に戦地で、充分働くことができ、どんなに喜ぶこととございませう」

「おう、それはいいお考へぢや」

和尚は、のぶの言葉に、すぐ和して、

「では、仰せのとほり、すぐ分骨してさし上げませう」

「ありがたうございます。正雄はそれでどんなに満足に思ふこととございませう」

のぶの瞳に、キラリと露のやうな泪が光つたが、しかしそれは、もう悲しみの泪ではなかつた。

それから間もなく、暮色迫る、〇〇小學校の出征〇〇部隊の面會所に駆けつけ、出征兵に眞新しい白木綿の袋を渡す母親の姿があつた。

云はずと知れた、鈴木のおで、兵は長男の信春歩兵上等兵——白木綿の袋は、正雄の骨を分骨して入れたものだつた。

「信春、いいかい？——きつと正雄と一緒に、お國のために、りつばな働きをしてきてをくれよ——」

「大丈夫です、お母アさん！——きつと正雄と一緒に、頑張ります！」

かくて、いかめしい戎衣の上に眞白く光る弟の分骨袋——弟の遺骨を背負つて、信春は、〇〇日、〇〇驛からニツコリ笑ひつつ怒濤のやうな歡呼の聲におくられて、勇躍征途に上つたのであつた。

(野原完二郎)

三井品史編

浄土宗要覽

全巻寫眞を主として、それに簡にして要を得た説明を加へ、一目浄土宗の成立ちと現勢、浄土宗行事などが解るやうに編輯した、一般信者に手頃な折本定價普製四十錢、布裝五十錢送料三錢(池袋、みとしへ社發行)

俳壇

大田 耳動子



新宮市 奥村 映水

水

薄氷流して遊ぶ金魚かな

江南 神田 榛琴

新宮市 奥村 映水

水

初雷や乾勢馬とかじりあふ

千葉 村中 興一

新宮市 奥村 映水

水

部隊長の聲の氷柱や莞爾たり

香川 荒木 はち

新宮市 奥村 映水

水

草餅に米壽の齡たまはりぬ

神奈川 吉田 智平

新宮市 奥村 映水

水

僧ひとり薄日に暮れて花御堂

浦安町 森田 法晃

新宮市 奥村 映水

水

春雲の影のおもたき早瀬かな

富山 内山 恭水

新宮市 奥村 映水

水

浅春の越の山脈いま暮るゝ

山口 山本 眞性

新宮市 奥村 映水

水

二つ三つ目高遊びて水温む

滋賀 重野 ふみ子

新宮市 奥村 映水

水

水番のいちはやく雨きゝにけり

会津 斯藤 華舟

新宮市 奥村 映水

水

浦公英に蝶誘ふ日の静かなる

京都 永田 七郎

新宮市 奥村 映水

水

渥葉會の空青うして雪散れる

京都 永田 七郎

新宮市 奥村 映水

水

香たいて初の辭令を拜しけり

神奈川 小宮 繁八

春雨に隣りもひそと朝寝かな

香川 日向 法月

櫻には些かはやし涅槃寺

青森陸軍病院 宅重 謙吉

傷兵に園爐裡はぬくゝラチ才聞く

三重 別府 規子

子を負うてめでたく難煮よばれり

大分 石堂 柑山生

春雨の夜更けて鯉の跳る音

京都 福島 幸治郎

鴨河の水の碧に雪の原

大阪 日根野 谷三弘

眩ゆくも遠く霞みて春の野は

名古屋 反淵 製媛雄

卒業の撮影済みし生徒かな

千葉 安田 保治

初節句の寫眞もそへて慰問かな

栃木 大輪 云海

月の暈かゝる桐こそ池に映ゆ

千葉 屋代 吟風

菜の花の黄に水郷の雨煙る

廣島 小島 邦香

お彼岸の腫張る兒に多幸なれ

山城 馬野 智善尼

月夜かとしきたる桐の落花かな

東京 神田 椿

近江路の古き伽藍に寒きびし

東京 神田 椿

鯉口の音うすれゆく春の宵

堺 木全 澄子

沈丁花椿に並べ移し植う

東京 堀 恵

咲くよりも散るが愛しき櫻かな

山口 長田 見智

新らしき桑くゝられて春の雨

堺 笠井 松枝

久に來し故郷の菫かな

名古屋 山田 眞須美

手洗鉢の水澄む朝となりけり

京都 永田 七郎

春雨に起きるともなく聴きゐたり

福岡 三浦 鶴子

春宵の軍事郵便にまどろかな

小樽 中村 茂舞

藤棚の湧井に映る花白し

米子 宮本 白土

梅林の月に僧形牙えゐたり

神奈川 天明 耕生

木蓮に夕月の色きたりけり

朝鮮 鹽江 八年坊

十一年病の波に彼岸かな

奈良 寺田 惟牛

カラ／＼と水くむ家の梅咲けり

神奈川 吉田 智平

うそ寒き河風頬に渡し口

神奈川 吉田 智平

投稿規定

官製はがきに一個二句以内
とし「俳土」編輯部併係
あて送ること

北支の偶話

此木田玄鳳



家

支那に居て支那の家を見慣れてゐた眼で日本へ歸り日本建の家を見ると色々の感じが起つて来る。

下關から汽車に乗り込むと汽車の進行に連れて懐しい日本の風物を間近に見せてくれる。そしてその山や森も、川も水も橋も、河岸の土手の雜草も、それ等の一々がやさしい顔で私達を送迎してくれる。その時の私達の気分たるや、愉快とも、感謝とも、何とも云ひ表はせん嬉しいものがある。

さういふ間にも、とりわけ奇異に感ぜられるのは家である、殆んど木材ばかり組合せて出来てゐる。壁が少く戸障子が多い。それ等の建具を取はづせば後には屋根と柱とだけし

か残らないであらう。そして家のまわりには、ほんの形ばかりの垣が巡らしてある。犬でも人でも自由に家の軒下まで近づいて行ける。物騒千萬といふより外はない。次には其家が非常に多い、到るところ家だらけである。ものゝ一分と家の見えないことはない。一體こんなに家が澤山にあり、人が多勢住んで居て、その人達は何をしてゐるのだらう、又何を食つてゐるのだらう。家と山と森や林を除いた僅かばかりの田畑から獲れる位のものでは、とても足りさうにも思はれぬ。

支那の家は四方みな泥壁又は煉瓦で圍はれてゐる。そしてその一方に狭い出入口と小さい窓があるばかりだ。家の周圍に土塀があ

り、それ等の家の集積たる村や町の周圍にも頑丈な土塀が築かれてある。市街地ともなれば立派な城壁で圍はれてゐる。

私は此の家の建方の相違が、そのまゝ兩國の歴史、風土、民情の差異を物語るものと思ふ。支那の家に壁の多いことは一は木材の不足にも依るだらうが、それよりも酷烈な寒暑と風塵を防ぐ爲めであり、家や町の周圍に堅固な土塀を築造せるは盜賊の侵入を豫防する必要からである。即ち古來都鄙共に治安が十分に保たれず、大小土匪賊の襲撃が絶え間の無かつたことを有力に證明してゐるのである。

日本は之に反して國の小さい故からでもあるが、平和な歲月が續き、殺伐な群盜の襲來等は皆無と云ふても良い幸福な國情に置かれてあつたから、特別の要害設備をする必要がなかつたのである。又戸障子の多いのは氣候が溫和であつて、寧ろ朝夕開放して大氣を通入せしめる爲なのである。これは家ばかりでは無く被服も亦、日本服は襟、袖、裾の總てが開放的に出来てゐる。

此の被服や住宅の開放しは自然と國民精神にも影響し、磊落にして小節に拘泥しない性格が養はれて來たものではなからうか。尤も日本の國民が比較的無欲無我であり、恬淡である原因の一に佛教の多年の感化をも無視することは出来ない。

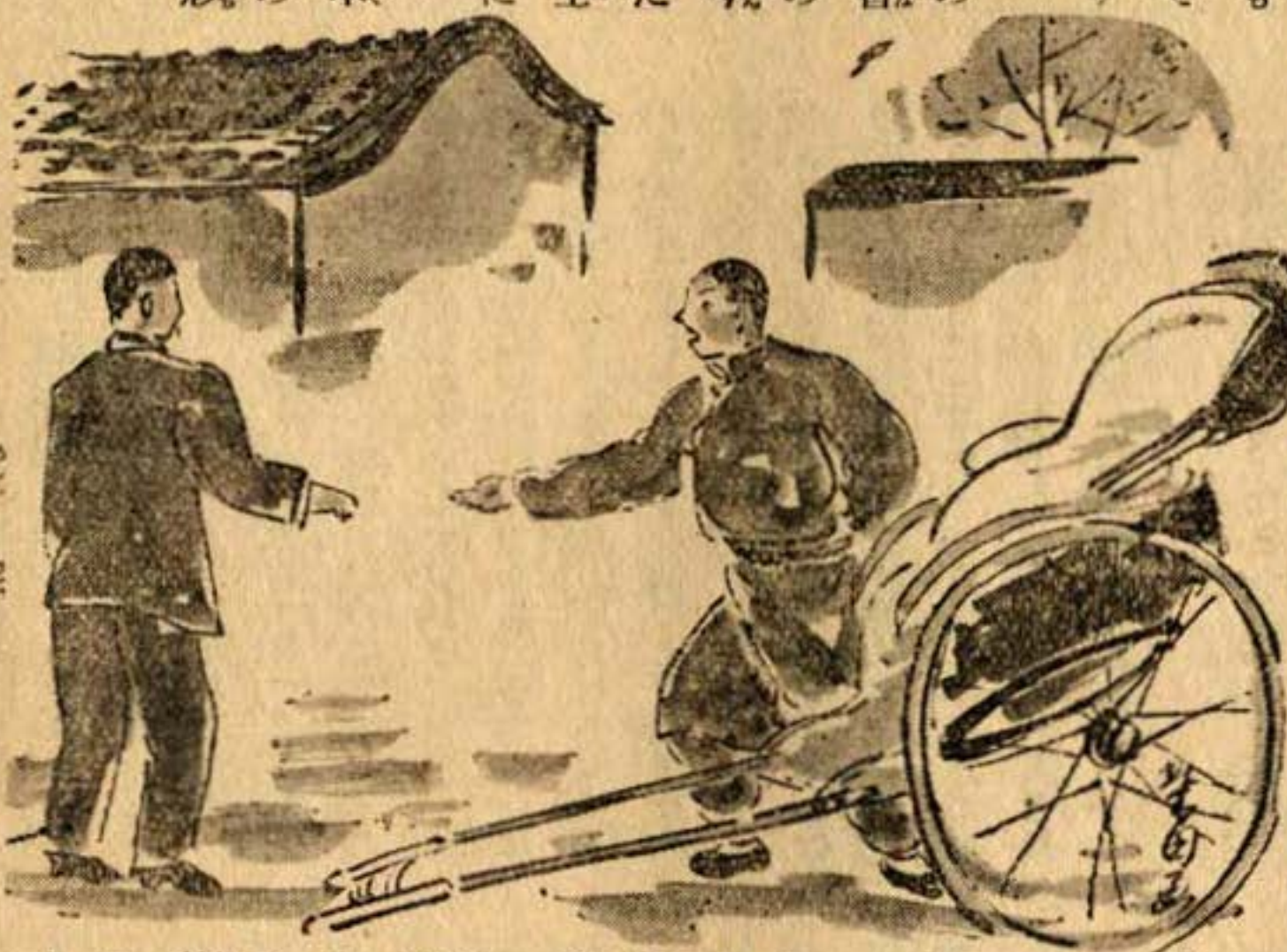
序年ら支那には闊の着いた引戸といふものがない。出入口は元より、戸棚でも何でも皆開き戸である。又日本の疊の發達等も建物の構造、即ち風通しが良く出來てゐるために今日の如き部厚い疊が用ゐられるやうになつたので、日本の如き雨量の多い、濕氣勝な風土で支那風な家であるならば疊は一年經たずに腐つてしまふだらう。

朝鮮の家は概して狭小であるが、柱に丸木材を用ゐ、床板を張り、壁を多くし、障子の部分の少いところ等は日支の中間を取つた形である。

面子

支那人は面子を重んじるといふ實際その通りで、使

用人が何か悪いことをした時、他に人の居る所で叱ると、多くの場合その使用人は暇を取



つてしまふ。それは面子を潰されたからである。日本でも人前で奉公人を叱ることは餘り

良くはないが、一は本人に恥かしい目をさせて懲りるやう、二は他の者に見せしめの爲め一舉兩得のつもりで往々これをやるが、其効果は却て悪い場合——當人に反抗心を懷かせるとか、主人を逆恨みさせるやうなことが多い、併しそれが爲に直ぐと奉公人が逃げ出すなどは滅多に無い。

又支那人は金錢に對する執着が非常に強いとされてゐるが、面子を保つ爲には其金さへも顧みない場合が少くない。一例を挙げれば北京では洋車（人力車）が多くあつて、値も安い。普通一時間乗つて十五錢見當遣れば良いことになつてゐる。或時私が二時間ばかり洋車を乗り廻して、別院に歸つて三十錢遣つた。ところが車夫はこれでは足りない、もつと呉れと強要した。これは何時ものことで、彼等は幾程遣つても滅多に満足らしい顔をしてない習癖である。ところで餘り執拗にセガむものだから、側に居た者が、三十錢でも多過ぎる二十錢で澤山だといつて、彼の差出してゐる掌の上の三十錢の内から十錢取り上げ

雨花台攻撃の歌

人見部隊西島隊神戶隊

末村啓一郎
安田秀賢

雨花臺上弦月暗

一、肌なほ寒き

轉戦こゝに

露營の夢も

敵逼ひつめし

紫電一閃起歡聲

二、砲暗破る

つどふ敵兵

秋水ひとたび

たちまち起る

南是南京不落砦

三、難攻不落の

屍山血河を

劍撃磨する

奪ふはこれぞ

曉立旭飾拜東天

四、あゝ戦友の

たむけの花ぞ

旭飾朝日に

今ぞ吾等は

入城す

なきがらに

香も高し

かゝやきて

友に手向けた

(安田秀賢君は出征中の淨土宗僧侶、南京城外攻撃に参加、その激戦の跡を回顧し、西島大隊長の蒞時の主旨を骨子として、詩を作り、以て亡き戦友に手向けた)

た。(勿論これは良くない仕業ではあつたが、車夫の態度が餘り強硬なので聊か癪に障り、斯うもしたら先方が折れて出て「それぢや其十銭だけでも返して下さい」とあやまるだらう位に思つたのである)すると車夫は憤然として残りの二十銭を地上に抛げ棄て、何かブツ／＼云ひ乍ら車を牽ゐて歸つて行つた。これなんかも彼れ車夫にして見れば、自己の勞働に對して報酬を得たのである。多い少いは客の任意であり、多額を請求することは勤勞者の隨意である。その辭を低くして割増を請願する者に對し、顧客は假令二銭三銭でも追金を遣れば双方の面子が立つ(そうゆふわけで支那人なれば大抵は二三銭増してやる習慣である)然るに何ぞや、一旦呉れた錢まで取上げるとは、俺の面子をどうしてくれると云つた氣持で、大事なお錢を棄てたのであらう。

買物をする時でも、たとへば一個の品物を何程かと聞くと一圓と答へる。元より掛値の多い支那商人のことだから、値切らねば馬鹿を見ると思ひ、「高い」といふと、先方から必ず「貴方はいくらなら買ふのか」と尋ねる。これ等も日本には無いことで、買ふ方で値段を定め、双方折れ合ふた所で賣買が成立するのであるが、つまりそれは、賣主が一旦いくらと値を云ひ乍ら、自分で、も一度安くいくらにする云はれぬ、面子が立たん、それ故お客に値を云はせ、そこで歩み寄ればお互に面子が立つといつた氣持である。

彼等は自分のみならず、他人の面子を損ずるやうなことは決してしない。従つて人の惡口や、蔑口は恐らく口にしない。若しどうしても云はねばならぬ場合は極遠廻しに云ふ位である。面子尊重は全く現代支那民衆道德の基調を爲すものである。

本變今後の處理にしても、大小の別こそあれ、支那人に應接するには、いつの場合にでも彼れの面子を毀はぬ用意と方法を忘れてはならぬのである。

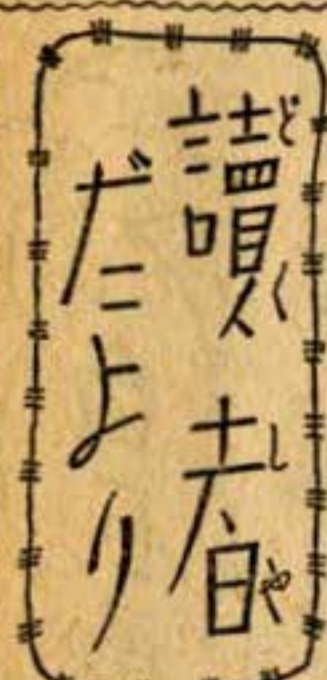
陣中便り

中支〇〇部隊 金輪 隆信

出征以來茲に〇〇月餘各地に轉戦移動を續けて参りました。その間幾度かの激戦にも参加しました。が幸微傷だに負はず今も尙元氣旺盛で而も第一線にたち活躍を續けております。

時々故郷より届いて参ります。「淨土」を何よりの慰安としております。貴の激しい戦闘の勞れも忘れて塹壕の中で沒せんとする夕日にすかして讀んでゐる時、何とも言へぬ感にうたれ舞々と佛陀の有難さ、その心強さを體得しております。

彈は相變らずヒュー／＼異様な



音をたて、これは近いこれは遠いと挨拶して来る様に頭上を飛んでゆきます。そうかと思へば、ポテツト奇異な音がして坐つてゐる前に落ちて来る時もあります。

然し只今では〇〇沿岸の安全確保も得て、長期建設、宣達工作、治安維持、授産工作等への波につて参りました。

土民の逃避から歸つて来るものも見受けられる様になりました。各戸に日の丸の旗を掲げて皇軍の歓迎をするのもいじらしくたのしいものです。

中には「シーサンシンジョ」と川魚を持つて来てくれる子供には深く勇士の胸をうつものがあります。

遙か彼方の山頂に日章旗がへんぼんと旭日に映えてよく皇軍の武威宣揚を物語り、皇運の彌や榮えゆくを壽ほぎ奉らざるをえませ

ん、一日も早く支那全土に和平樂土の春が訪れて参ります様合掌してやまぬ次第です。

軍病院にて

北支 榎本松太郎

自分は去る日北支の戦線に於て負傷し、白衣の身となり、唯今滿洲〇〇陸軍病院に入院致しております。ふとした機會から御誌「淨土」を拜讀させて頂きました。不快なる病院生活に一抹の光明と法悦を與へて頂きました。そして強き信仰の道へと導いて頂きました。

唯今では全快して再び北支の戦線に参加しておりますが之皆信仰のお蔭と厚く感謝しております。

布教資料に

地方寺院一讀者

拜呈御會ます、御發展御祝申します、出版會に微々たる本宗の官

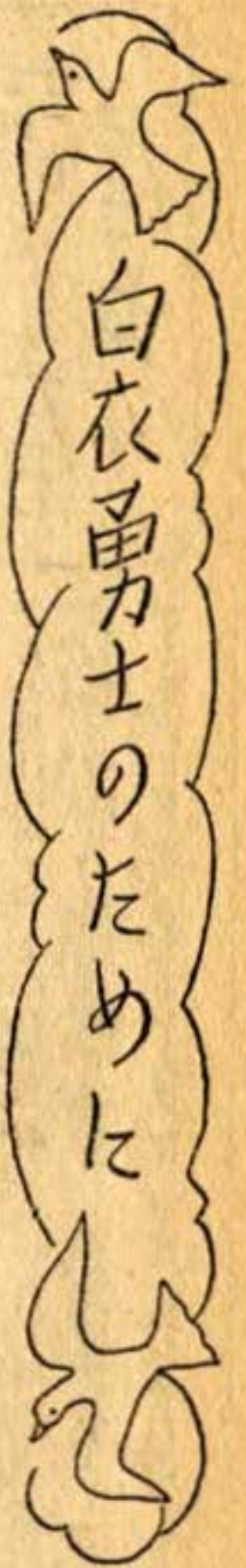
報とも言ふべき宗報誌上は宗内發行新刊書籍及び布教用書の廣告なきを見ても當局が如何に是等に對して冷淡なるかを思ふ時一種の反感をさへ生ぜしめ申候。

淨土、眞理、共生等の諸誌が如何に地方寺院に對し刺戟と新布教方面に目を進めつゝあるか。新本購讀に相當に手間と苦心を要する地方寺院に對しては實に良好の布教資料にて感謝致し居り候。

「淨土」よ進め

京都 東山 居士

毎月の「淨土」を拜見する度に清新潑潑たる氣分を以て信仰運動に邁進せられてゐるのが現はれ感謝に耐えません。最近宗門新聞などの質が低下しくだらぬゴシップなどのせていゝ氣になつてゐるのと考へ合せて、淨土の益奮はれんことを希望してやみません。



遺品と傷兵

島野 禎 祥

私の弟の勤めてゐた小學校は田舎の野原の中にあり、汽車がその横を走つてゐた。だから私は田舎の家に歸る途中、上京の途中にはその學校を眺めて通過することが出来た。學校の庭には國旗掲揚塔があり、いつも國旗がはたはたとひるがえつてゐた。

弟が出征してからは學校では弟の寫眞をかけて、職員と生徒が毎日それに武運長久を祈つてくれたそうだ。去年の秋も深まつた十月、弟は中支の星子驛訖と云ふ所の戦場で名譽の戦死を遂げた。そして年暮さし迫つた十二月末に遺骨が歸り葬儀が村で盛大に営まれた。爾來雨が降つても

風が吹いても小學校の教へ子達が毎週日を定めて墓参してゐてくれることをきいた。

先日やはり田舎に歸る途中汽車の中でその村の助役さんに逢つた。そこで學校の職員も毎週月曜日とか土曜日にはそろつて墓参して下さつてゐる話を聞いた。私は田舎の純朴なる小學校の生徒達や先生方の心情を胸に浮べて涙が出た。そうした村の學校で教鞭を取つてゐた弟は幸福だつたらう。

葬儀の時校長先生の弔辭に次のような意味が述べられたのを思ひ出す。

「先生は普通の小學校の先生とは異つた所があつた。子供に接する時も吾々職員の間

にあつても異つた所があつた。ものにこだわらず、思ふことは何でも言ひ、あとには何ものこさなかつた。どこか精神力の強い私達にはない力を持つてゐた……」

私は戦死した弟がどんな教員生活をしてゐたか、離れて住んでゐたからよくわからないが、とにかくかうした村の子供達に毎日接してゐたことは意味がなくてはなかつたと思ふ。

私は汽車の窓からその小學校の校舎を見るごとに、弟の生前よりもその風光がなつかしまれる。永遠にこの風光の中に弟のおもかげが生きてゐるであらう。

×

三月十日陸軍記念日の當日、弟の遺品が、原隊に着いたから取りに来るやうにとの通知を受けた。私は墓参ながら先日弟の所を訪ねてその遺品を見た。軍刀はかなりいたんでゐた。その他の品々も一年餘ケ月大陸の戦闘のおもかげを忍ぶことは出来た。だが、ほんとのことを言つて私の心に

ジンと來ないものがあつた。私は原隊から渡された遺品目録を見てゐたが、その中に茶道具一揃とあるのが不思議だつたので、これは何のことだらうと思つた。内地から贈られた財閥品でもあらうかと思つた。ところが母が出して來た品を見ると私はハツとした。それは母が日頃やつてゐた茶道に用ひる茶道具の一式ではないか。それを戦地の街の商店で、も見出して購つたものだらう。故國にガイセンの時の母への土産に求めたのであらうか。それとも戦鬪の餘暇、一服の茶をたしなむために求めたのであらうか。私は還送された遺品の中からこの茶道具一揃を特に弟の心のこもつた品だと思つた。弟が山村の寺に、學校を出ると一人やられて、若い者にはあまりに閑寂の寺院生活を始めた當座、一人でお茶をたてゝは飲んでゐたと聞いたことがあるが、いつ習つたのか、母がたしなんだお茶の湯を見れば見真似でおぼえこんでゐた弟、まだほんとに若かつた弟であつたが。それから

十年、お互に三十の坂をこした今日、お茶の湯の精神も、おぼろながらわかるような氣がしたして、私もそのお茶の湯を少しならつて見ようかなと心に思つてゐたやさき、私はその遺品を見て、何か弟に一步先きにやられたやうな氣がした。

弟の戦死直前の走り書きの何枚かの葉書は皆同じように「漢口へ漢口へ」と結んでゐた。私は弟がその茶道具一揃を持つて故國に歸つて來る日を空想して見る。

×

弟の中隊長も弟が戦死した同日兩手右肩を負傷し今は東京の病院に來て居られる由、一度お見舞申し上げ、戦場の話など承はりたいと思ひまだ果さない。最近新聞社などでも色々傷兵雜談會など開いて傷つき歸られた將兵諸氏の第二の祖國御奉公の有様や經過が綴られてある。砲臺戰雨の中生死一枚の境をかけめぐり不幸傷付き或は病を得て祖國に歸られた將兵諸氏も随分多いであらう。然しこれらの諸氏こそ眞に

強く生きる自信が心の内に燃え上るであらう。今まで経験しなかつた困苦にも堪えねばならぬであらう。だがジカに戦場で體驗した新しい日本の使命を自覺するものはこれら傷病兵の諸氏である。眞の銃後活動に担車をかけ赤熱せる魂を吹きこみ得る者はこの諸氏である。諸君の肉體には日本の新使命の自覺が印されてあるのだ。

今後いよいよ日本の理想實現に進む時、諸氏こそその先頭に立起しなければならぬ。戦時、戦後を通じていよいよ困難も増すであらう。出征者家族、戦死遺家族を守らねばならぬ。前線、銃後の紐帯になつて私はこれら傷病兵諸氏の再期の日が念じられる。

弟と中隊長とは中學も同窓だつたそうだが。今兩手首を失ひ右肩に貫通銃創を受けて病院に再起御奉公の日を待たれる弟の中隊長を思ふ。おゝ祖國永遠の礎えは事變の進行と共に築かれ行く。祖國に殉ずる國民に榮光がある。

宗教への門を語る座談會

阿字の辨

龍口吉之助氏「阿彌陀の阿は阿彌とか阿闍などの阿と同じですか。彌陀とも申すやうですが。」

中村辨康師「阿彌陀は無量の意で、阿字は否定の接頭語です。阿彌陀佛とは、それ故、無量と名づくる佛であります。では何が無量かと言ひますと、アミタユス、アミタブハー即ち無量壽、無量光の佛であるのです。これは永遠の生命と無限の向上人格の完成とを指し、生きとし生ける者の本有の欲求なのです。此の氣持が眞に宗教

的に轉じたものが、變善提心の姿であり、念佛の姿であります。念佛はこの無量壽無量光の姿であります。阿字が斯様な無の意味だとすると、阿彌陀といはずに彌陀といつたのでは、無量でなくて有量になるやうですが、しかし、それは慣習上の呼稱のことで心持が同じであれば一寸も不思議はありません。蟻川新左衛門が一休和尚に、ナンマイダーと言つたりナムアミダブツと言つたりでは佛様が面喰ふ、と申しますと、一休はそれには答へないで、蟻川々々、新左衛門、蟻川新左衛門と呼びかけます

ので、一々にハイハイと返事しました所、それ見ろ、ナンマイダブでも南無阿彌陀佛でもこちらさへ眞劍に呼びかけ申すなら變りはないのだ、きつと佛様は聴いて下さると申したさうです。また、阿彌陀佛の光明と壽命と智慧と慈悲との二面を示すとも申されます。宗教的には、善導大師は何れかと申しますと、無量光を、法然上人は無量壽の活動をばより多く仰がれ慕はれたやうであり、従つて善導大師の宗教は六時禮讃にても分りますやうに詠歎的な部面が強い、これに反し、法然

上人のは、温かい救済的活動力に對して打込まれて行つたもので遙かに生活的と言へると思ひます。」
吉田耕作氏「羅漢様の阿羅漢はどういふ意味ですか。」

中村師「阿羅漢もアルハットの音譯で、應供者と譯しますが、阿には別の意味もあります。四向四果の中の阿羅漢果で應に供養するに値する者の義です。所謂聲聞の位がそれです。聲聞根性などと蔑るやうになつたのはその熱烈な自己の解脱をめざす修道者の態度を餘りに個人主義なりと見たもので、この變化は大乘教が興つてからです。始めは如來應供等と佛の稱號として用ひられてゐる位です。徒らに舊き經典を唱誦するのではなく、眞の解脱の道を求むる出家沙門こそ供養するに足る者だといふのです。」

知識と體驗

平野瀧一氏「漢退之の佛骨表でしたか讀んで思つたことですが、若し彼が本當に佛を知ることが出来たなら、あのやうな不平家にはならぬ筈だと思つたことでした。」
 中村師「白樂天が趙可禪師に佛敎の要諦を尋ねた所が、禪師は有名な七佛通誠の偈を示された。即ち、「諸の惡は作すこと莫く、諸の善は奉行し、自ら其の意を淨りする、是れ諸佛の敎なり」といふのです。これを聞いて白樂天は、左様な事なら三歳の童子も知つてゐるといつた。すると趙可禪師は、三歳の童子も能く之を知る」と雖も百歳の老翁も能く之を行ずる能はずと言つたといふことです。

眼で見、頭で讀むのと、身體と

は違ひます。所謂理解と體驗との相違です。知識と體驗です。信仰は知識ではないのですから、その人の體驗の中にこそ味ふべきです。

理窟の上では分つてゐても感情の上、實際の上では仲々分らないものです。つい向つ腹を立てる。つい欲心を起す。知つたか振りの人生でなく、眞に一回限りのこの生を徹底して歩みたいものです。」

愚に還る心持

禪淨信尼「かへつて無知の者に無我の姿があるやうに思はれますか？」

中村師「無知が無知であると自認する所に無我の心が見られる。」

尾崎傳次郎氏「無我こそ本當の知我ではないかと思ひます。私はそこに未完成の完成があると思つ

てゐます。自分にこだはらないのが空即ではないでせうか。」

中村師「本當に自己を抛り下げるとき、こだはることも憐ぶることもないのです。拘泥する時は既に有我です。未完成の完成とも言へるでせう。南無の心を押進めて行く所に未完成から完成があるでせう。不斷煩惱得涅槃分が、つまりその謂です。」

ソクラテスは自分は何も知つてゐぬといふことを知つてゐる丈他人よりも知つてゐるのだと申しました。自らの無知を無知とする素直な心が肝心なので、知れるを知らずとする心ではない。それでは、虚飾、卑下慢となるでせう。」

信尼「何も知らぬ素直な心になることが貴いのですね。飾る心がある中は無我にはなれぬものでせうね。」

人性の叢藪

中村師「人性の惡質、それを素直にみつめてゆく心——それが宗敎へ入る門だと思ひます。人間の心の動きの諸部門、智情意の働きに則る理想價値は眞善美であり、その逆が偽惡醜だと言はれます。眞善美を希求するのが、人間心の眞の願なのですけれども、かやうな氣高い心持に終始し得る人は極

出席者氏名

本誌側

中村 辨康 師

讀者側

瀧口吉之助、吉田耕作、平野瀧一、禪淨信尼、尾崎傳次郎、新井嘉門等の諸氏
 (白山上、橋本方、淨き友の會座談會に於ける質疑應答中の抜粹)

めて稀でありませう。常に我々の心には偽悪醜の念ひが湧く。此の暗い藪叢に分け入るとき、人は人性的の悪質の烈しさに思はず溜息をつかざるを得ないであらう。

多くの聖者達の書かれた懺悔録告白書を讀むと、如何に彼等が卒直にかかる暗黒面を凝視し、嘆き、そしてそこから強い信仰の光に浴し得たかの道程についての深刻な懺悔と歡びとの内面的な記録を見出すことが出来ます。

親鸞上人の所謂「地獄一定樓家ぞかし」の嘆きも、そこから出て居ります。事實に反省して自分の心の拙なさが感ぜられる時、かかる心底からの歎息が發せられるのです。そこに如來の本願あればこそかかる罪惡の凡夫も救はれますとの信仰が生れたことです。河の流れにはあらゆる汚惡が含

まれ浮んでゐる。しかし河水はそれを浮べたまゝ、含んだまゝ、坦々として流れ去る。

その如くに、心にはたとへ偽悪醜が常に湧いても、それにめげず、それを水に聞き流してゆき、常に少しでも如來に近づいてゆかうとすべきであります。

そのやうな、如來へ近づきゆく生活にも、聖道門的に、汚穢を滅し失くしてゆき、淨化し克服して理想的に自らを高めてゆく生き方もあります。自分をたたき直し／＼してゆく、上の眞善美を追ふ生き方です。自力的な強い意志力と實行力に富むた生き方です。しかし、法然上人や親鸞上人の進まれた道も、それにもました徹底さからとも言へませう。還愚の心持、それは、深く／＼自己の現實に眼をやつた、反省と懺悔との心持で

す。誰でも自惚れはあるが、その自惚根性を打破する鋭い自己批判からです。自分を抑り下げること深ければ深い程、益々自己の惡さ拙さが分る。それが身に泌みることと強ければ強い程如來への南無の心が起るのであり、この心が深刻なればなる程また救ひの心もはつきりするものです。」

宗教への門

新井嘉門氏「聖道門と淨土門で

はどちらがやりいのですか。」

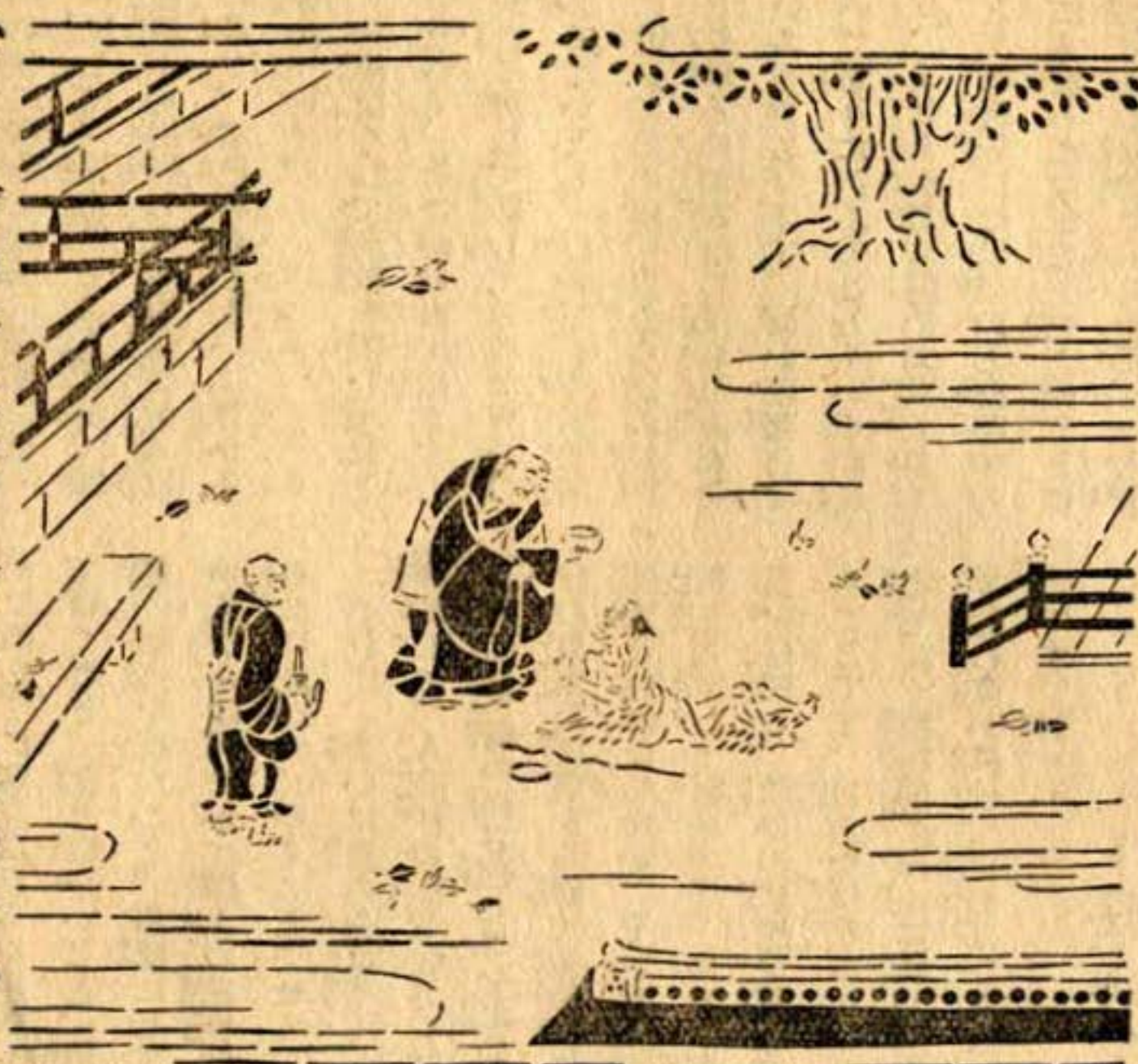
中村師「理想主義的な心持は誰にでもある、何人もよくなりたい心持は持つのです。自分の本心から満足出来るやうな生活をしたい念願は、恐らく誰もが持つてゐるのです。佛性といふか、菩提心といふか、何人も本心の満足のゆく生活をしたいのだが現實はそれに

反する點が多いのです。やりいやりにくいの問題でなくて、實際やれないのが現實なのです。機根即ち人間性に深く徹すれば徹する程、自己の現實には理想に反する點の多いことに氣付く。大原問答で法然上人が諸宗の碩學を對手にして而も「機根比べには源空勝ちたり」と申されたのは、上人が如何に深く内的反省を持たれたかを示すものです。流石の碩學達も深く自己に振返つた時、上人を導師に別時念佛をせざるを得なかつたと言ひます。反省が浅い中は自己の眞の姿が分らないのです。常に縁ある毎に悪い素質、煩惱が湧き起る。ともすれば煩惱に流されて了ふ。三途の業をやる。惡業苦の渦中に墜没して了ふ。貪瞋痴の地獄相の中に暮して了ふ。偽惡醜の中に生き流される。

(第廿五)

明通のシテ

千時上人を八王寺

芹澤鍾介氏作
合羽刷繪巻一部

心だして、おぼえを念おこし、おぼえして念停せんと、
 思はんは、おぼえの目、思はんは、おぼえの目、思はんは、
 思はんは、おぼえの目、思はんは、おぼえの目、思はんは、

それならば、遂に救はないか。へ
 眞善美の理想には達し得ぬか。生
 きても死んでも救はないのかと、
 進退谷つたとき、轉て必ず心に指
 しそむる光りを見出し得るもので
 す。それは何か。如來の本願慈光
 なのです。大宇宙の中に凡てを生
 かしめ向上進歩せしめゆく力が感
 ぜられねばならない。生死の波に
 もまるゝ我をも包む大生命力が感
 ぜられる。そこに無力な自己を投
 げ出す心境が轉回する。それが南
 無の心であり歸命の姿である。こ
 の心境に到つて始めて如來の心に
 添つてゆく氣持が、ほのかながら
 湧起る。愚かな自分ながら、念佛
 の中に始めて生き得る安らぎを感
 ずることである。親の心の如き大
 御親の心が天地に満ちてゐること
 を感ずる。此の心を知る時増上緣
 の力が強く働き煩悩の力が寧ろ小

縁と變じて、救はれる事實が強く
 感ぜられるやうになる。人の子の
 親は悪い子程益々深く泣き悲し
 む。天地の大慈悲心は罪惡の凡夫
 程強く加被せられる。その心にと
 つつけばよいのです。歸命の歸は
 とつぐと訓む。とつぐはとつぐ
 で、救ひの綱にとつづく姿が歸命
 なのです。

聖道門と淨土門

聖道門といふのは聖は完全で理
 想を説いたもので、いはば理想の
 教であるが、しかし深く人間その
 ものを反省するとき理想は高くと
 も生活の事實は然らず、そこで事
 實の上から救ひに達せんとする、
 いはば實踐法門ともいふべきもの
 が淨土教であります。従つて聖道
 門は理想を説明するが、淨土門は
 人間そのものの生きる姿を直視し

てそこから新しい生き方を求めてゆくのです。それで聖道門が理論的考察に富み佛性論に重點を置くに反して、淨土門では人間論、機根論から出發し凡てを現實的人間の救ひ、自己の救ひといふ點から眺めてゆく。

口傳なくして聖教を読む勿れとの教へも、そこから出てゐます。聖者に對して話してゐるのは自分の爲でないとし、愚者下根下劣の者に説いてゐるのが、自分の爲の法門と受取るのが本當の受取り方だといふのであります。高い理想と聽いて憐れたかぶることもいらぬ反り、また大聖者に進めた教を見てとても自分には出來ぬと悲觀するにも當らぬ。「憍慢と幣と懈怠とは以て此の法門に入るを得ず」と言はれてゐる。高慢心を捨て、卒直にへり下つた心持、敬虔な心持に

なること。さればとて幣といふ如き自ら駄目とすることがなく、卑屈に陥らずに素直に自らを生かしてゆくこと。怠り懈ないこと、精進の氣持を持つこと。斯様にしていくなれば、やがて淨土の法門は目前に開かれてゆくこととせう。

されば、大いに自らを反省し、直視して、人間性の脆さ弱さを知り、煩惱執着の強さ烈しさを思ひ、此の深刻な反省から總て積極的に轉回せねばならない。それを信機信法と申して居ります。自らの機根を信知し、救ひの法門を信受することです。自らを反省懺悔する次第でなく積極的に向上に向つて突き進む姿が開けて來ねばならない譯です。云々」

(以下次號)

S.S.S.

金はンベ金
亂賣にンベ金
優にンベ金
サエンス合金

！をンベ金



¥150以上

筆年萬合金・スエンス ★

信仰相談 中村辨康

死後はあるかないか？

問

人間が死んでから別に便りがあるかどうか、また佛教で教へるやうに人が「五蘊假和合」のものであるとするならば、死と云ふ解體作用に依て、何だか死後は「虚無」になつてしまふのではないかと云ふ疑問が起りますが、果して何う云ふものでせうか。(淨き友の會に於ける某氏の質問)

答

この問題は極めてむづかしい問題で釋尊當時に於てもかうした質問をした人がかなりあつたらしいのですが、何時も釋尊はそれに答へられなかつたと云ふことです。

然し之は誰でも一度は疑問にすることであり、隨て誰でもこの疑問に對して一應の解決は付けて置きたいと思ふことでせうから、當るか當らないかは存じませんが、私の信ずる一端を申し上げて見ます。

今ま假に死後が「虚無」の状態即ち死後は無いとして考へて見ますと「虚無」には差別がありませんから、現在色々に差別付けられて居りましても、死ねば皆な「平等」になる、と見なければなりません。そして若し死ねば「平等」になるのであるならば、それと同じ様にまだ生れない前も「虚無」の平等でなくてはなりません。即ち生れない前の状態とは均しく「無」でなくてはならないからです。若し死後のみを「虚無」とし、生前を「虚無ならず」とするのでは不合理になつてしまふからです。して見ますれば生前も死後も均しく「無」の状態であり現在のみが「有」の状態であると云ふ結論になります。之は「五蘊」と云ふ身體と精神作用とが「生れる」とに依て假りに和合して現はれ「死ぬ」とに依て解體して元のバラ／＼の状態に歸ると見たもので、其理論は一見科學的な合理性を

信仰上の御相談に應じます。御質問はハガキに住所氏名御明記の上、信仰御相談係宛御送附のこと、誌上匿名は可。

持つて居るやうに見えます。然しそれは唯物思想に提はれた通見であつて、何故に「五蘊」が假和合されるか」の問題を見落して居るものです。

若し生前も死後も「虚無」の平等であるならば、現在も亦た平等であるべきなのに何故かくの如き「不平等」の状態なのでありませうか。財産の豊かな家に生れて来るものあり、貧棒なところに生れて来るものあり、短命者あり長命者あり、健康に恵まれた人あり一生病氣勝で悩んで居る人あり、矢鱈に物事を苦勞にする苦勞性の者があるかと思へば、極樂トンボで呑氣な者もあるし、利好きな人、愚かな人、學問の出来ない人、大臣や大將になれる人、一生迂闊の上らぬ人、トントントン拍子に儲ける人、トントントン拍子に損する人、何をやつてもまとまらない人、何事もテキパキと處理の出来る人、顔の綺麗な人、醜い人、其他數へ上げたところも際限もない位、謂ゆ

る十人十色で、十人寄れば十人乍ら、百人寄れば百人乍ら、千人寄れば千人乍ら皆な違つて居ります。同じ家に生れ同じ父母に育てられ同じ學校に教育されても兄弟がスツカリ同じだと云ふことはありません。また同時に生れた双兒でも三兒でも顔形こそ似て居ることも、既に身長が違ひ聲が違ひ性格が違つて居ります。他人は見分け得ずとも親はハッキリと之を見分け得るのは何處か異つた特徴をそれぞれ持つて居るからで、スツカリ同じだと云ふことは無い譯です。かくの如く生前も死後も同じ狀態の平等であるのに、何故現在のものはこのやうに千差萬別された不平等なのでせうか。まぐれ當りにいい籤を引き當てたものは幸福であり、反對に引きそこねたものは泣きの涙で一生を暮らさねばならぬとは、餘りにも出鱈目であり餘りにも不公平であり餘りにも無秩序であります。

さればこそ唯物思想では共產主義を考へたり無政府主義を考へたりするのです。聞く處に依ればソ聯のやうな共產主義の國では、成る程同じやうに物が配給されても、物持ちのよいと悪いとでは格段の差で、幼稚園などで

もチャンとした服裝をして居る子供もあり、ボロボロの着物で靴もない子供もあると云ふ話です。平等に支給されても其子供の性格が異なるから同じ狀態ではあり得ないのです。然るに眼を一度外界に轉じますれば、何とまあ、大自然は秩序整然としてちつとも亂れて居らない有様に驚かされます。春來れば花が咲き夏が來れば暑くなる、太陽は毎日のやうに日の出と日の入りとが豫測した曆の通りに正確に循環して居ります。若し自然が無秩序であるならば第一曆など云ふものを造ることが出来ません。日月星辰の運行、春夏秋冬四時の推移、汐の満干から日蝕月蝕の時刻までチャンと算盤で割り出されて居る程の正確さです。此のやうに大自然の現象は秩序整然として居るのに、人間のみは出鱈目であり、行き當りバツタリであり、頓珍漢である

と云ふ理窟が成り立つてせうか。決してそれは許るされない事です。若しその出鱈目が人間の正しい姿であるならば、貧富賢愚の差別はよいとしても、なぜ社會は法律だの道德だのと云ふものをこしらへたのでせうか。元來

目でもいいではないですか。然るに生活の上に人工的な秩序(決して人工的なものではありませんが)を作つて窮屈な道德や法律で縛り上げてしまふなんて、謂ゆる持つ國と持たぬ國との現状維持で行かうとするのは英米流の手前勝手と云ふもので、其處には永遠性などある譯がありません。オギアと産み出された瞬間に一生が決定付けられて、一生涯迂闊があがらないと云ふやうな事が若し本當なら、誠にいい面の皮でこんな人間世界なんて馬鹿氣切つた事です。

果してさうなのでせうか。秩序整然としてあるべくしてある森羅萬象の中に、人間のみが果して秩序もなくあるべくしてもあり得ない有様であつて、それでよいのでせうか。またそんな出鱈目の中に何うして事の是非善惡を決め得られますでせうか。事物の道理と云ふものを何う云ふ標準で付け得られますでせうか。それとも唯だ生活上の御都合で決めるものなのでせうか。若しさうならば世の中は亂れに亂れて滅亡するのみであり、人間なぞに生れて來る者は餘程割の悪い馬鹿者だと云ふ事になります。

決してそんな事はありません。みんな有るべくしてあつたのです。過去世の業因に依て有るべく有らしめられて居るのです。つまり自業自得に依て千差萬別されて居るからこそ、整然たる秩序の中に居るのであつて、またその故にこそかくの如く平等はないのです。随て生前も不平等の差別状態であつたのであり、死後もまた不平等の差別状態が續けられて行くのであることがハッキリと推察し得るのです。言ひ換へれば現在差別されて居ること其事が死後に於て「虚無」の平等状態でない事を歴然と證據立てゝ居る譯です。だからこそ「五蘊假和合」される時、千差萬別して「假和合」されるのであつて、例へ「假和合」が解體されても、また次ぎの世の

私の迷ひをお救ひ下さい

(問) 私の母は神経痛で一年餘り苦しみました。最も苦しんだのは一ヶ月程でした。色々手當もつくし私も出来得る限りの介抱はした積りですが、死後九ヶ月になつてもまだ忘

「假和合」をなし行く「何物」か、繼續されて居ると見なければなりません。それが俗に云ふ「魂」であり佛教では之を「業力」と名付けます。つまり「生命力」のことです。無論理想としては、かうした差別の世界は嫌やです。だから聖道門としては菩提涅槃を得て差別の世界から抜け出やうと一生懸命に修行に精進するのであり、淨土門では如來の大願業力に引かれて平等の世界に往生せんと願求するのであります。以上は極めて常識的な解釋で是だけではまだ云ひ足りずまいが、餘り長くなりますから、一應御理解を得たこととしてまたの機会に譲らせて頂きます。

れられません。私は母が日増しに重くなるのを悲んで「お母様、唯だ一心にお念佛なさい。貴女は七十五歳までも生きたのだから世の中の事は心配しないで、今は唯だお念佛申し佛

様におすがりして居れば、死ぬのではなく佛様のお迎ひを受けて楽しい世界に生れかへらして頂くのです」と申しましたら、母は一生懸命にお念佛を唱へるのでした。然し私には何だか「苦しみ」をのがれる爲のお念佛」のやうにしか思はれませんでした。私は母を善知識に引合すことの出来なかつたのが残念です。母は苦しい時申しました。「今はこんなに苦しいがお淨土へ詣る時は樂になる。然し何時まで苦しむのだらう」と。それから死ぬ七日ばかり前から意識がなくなり唯だスウスウ眠つて居て其儘の状態で息を引取りました。私が色々介抱する度毎に母は手を合せて拜みながら「済みません」と申しますので「済まぬ事はありません。私は貴女の倅ですもの決して遠慮はいりません」と申しますと「何の、貴郎が倅なものですか」と云つてばかり居ました。其後よく母の夢を見ますが毎々喜ばれて居る母の顔を見ません。それでも此間一度心から母が喜んでシミジミ話をして呉れた夢を見ました。こんな次第で私は母の死を覺悟しては居りましたけれども何うしても諦められません。私は迷つて居ります。どう

ぞ私の心をお救ひ下さい。先生の御教示を御願ひ致します。(熊本・江田・五一生)

(答) 貴君の御孝心に對して満腔の敬意と感謝とを捧げます。貴君は御幸せです。大事なお母様を色々とお抱申し上げお念佛まで勤めて上げたのですし、其上にお母様からも深く感謝されたのですから、孝行をしたくても出来ない多くの人達に比較して何んなにお幸せであるか分らないと思ひます。自分の事を申しますのは相済まぬ事です、私は私の過去を顧みて貴君を本當に羨しいと思ひました。私の母は先年九十一歳で歿しましたが病氣になりましたして何分高年だから今度は到底駄目であらうと醫師からも云はれましたので、すが、恰度其頃一年程前から御約束したところがあつて何うしても一週間ばかり不在しなければならぬ事になつて居たので、何とかしてせめては私の歸るまで保たせたいと思つて色々醫師とも相談しましたけれども、前申す通りの老年で身體が枯れ切つてをりましたから、リンゲルや葡萄糖の注射をしても追ひ付きません。段々心臓も弱つて行きます。年病

みのこととて何處と云つて苦しいところもなく意識も明瞭で、自分としても死を覚悟して居りましたからお念佛をし續けて居りました、何分親一人子一人なので私としても去るに忍びないのです。其上醫師も「何うも此處二三日ではないかと思ふから先方をおことはりして最後のお別れをしては何うか」と云ふのです。然し信仰を生命とする私としては「法」の爲には私情を捨てなければなりません。一ヶ月も前から準備して人を集めて居るのに其直前になつて麻胡つかせる事は絶対に出来ないの何うしても行かねばなりませんのでした。だから死目に會へない事を覺悟して悲痛の思ひをし乍らも旅立ちしましたが、心配で心配で堪えられませんでしたから毎日電話をかけては容態を尋ねたのでした。段々弱つては行くが異常がないと云ふ答へを聞いて心配と安心とを織交ぜた妙な氣持で、それでも夜中に電話が鳴りはしないかを恐ろしく思つて居たのです。無論近親の者には皆な集つて貰つて居た譯です。三四日は無事に過ぎて「今晚あたりはむづかしいな」と思つて居ると、果して四日目の晩拾時頃だつたかに電話

がかゝつて「急變した」との事だつたので「皆んなして靜かに念佛の助聲をして上げて下さい」と頼みましたが續いて十一時頃になつて「今ま息を引き取りました」との電話がありました。かくてなすべき用事が終り寺に歸りまして臨終の様子を聞きますと、念佛の中からも頻りに私を求めて居たさうです。そこで止むを得ず恰度私位の年配の法縁の者が私をよそほつて「辨康です」と云つて顔を出しますと違ひますと云ひ乍らあたりを見廻して私の歸つて来るであらうことを期待して居るやうすであつたが遂に斷念して念佛の中に冥目して仕舞つたとの事でした。これを承りました時、何んなに私は胸を打たれたか貴君の御想像にお委せします。平素も餘り親孝行ではありませんでした、最後臨終の時に至つて子としての最も大なる罪を犯した私の苦しさ悲しさは今思ふだに涙の種です。如何に「法」の爲とは云へ、四人の子供の内たつた一人生き残つた親一人子一人の間柄であり年取つて杖とも柱とも思ふ子供の手から末期の水の一滴も受けず、信仰的にも絶對信頼して居た我子の口から最後のお十念をも聞きたか

つたであらうものを、其長い九十一一年のたつた一つの望みをも遂げさうずに死なしてしまつた私として、是程大きな罪はないと悔まれてなりません。かうした経験を持つ私としては今ま貴君の御手紙を見て何んなにほゝゑましくも御随喜申し上げた事でせうか。誠に私と比較して何んなお幸せの方かと羨しくも

お生憎さま

客『ボーイ、このチキンは一體何んだい？ まるで骨と皮ばかりぢやないかッ』
ボーイ『相すみません。手前共では羽根は差上げないことになつておりますので』

都會風に

田舎の散髪屋で、
都會から來た客『君、石鹼に唾液を吐きかけてどうするつもりなんだい？』
床屋の主人『旦那は都會の方ですから、村の奴等みたいに、顔に唾液を吐きかけたら、お氣持を悪くなさるだらうと思つて！……』

思つた事でせうか。お迷ひになることは有りません。あなたはお母様にお念佛をすゝめられました。あなたは確信を持つてお母様にお念佛をすゝめられたのでせう。其お母様にすゝめられた確信を貴君の胸にシツカリと抱きしめてモットモット其確信を確かなものになくしてはなりません。さもなければ貴君はお母様の死の直前にお母様に嘘言をついた事になります。お母様をだました事になります。貴君は決して心にもない事を云はれたのではありますまい。お母様をしてお淨土に往生させて上げたいと思へばこそさうすゝめられたのでせう。其言葉を單なる言葉に終らしめず貴君御自身の血となし肉となし生活となさしめなくては、たつた一人のお母様のいまはの大事に際して云つた其の言葉は死んでしまひます。お念佛なさつてそれを本當のものにして下さい。迷ふことはありません。迷ふのは餘りにもお母様の死を痛む爲にお母様にすゝめられた其言葉をあなた御自身の實行にうつすことを忘れて居られるからでありますまいか。だからあなたが實行にうつせばお母様の菩提をも増上し貴君御自身も救はれて行きます。

ます。またお母様の御念佛が貴君に「苦しみからのがれる爲のやう」に思はれたとしてもお母様としては貴君の言葉を信じたからこそお念佛をしたのであつて、苦からのがれやうとするのは當然の人情ですからよしそれが表面に現はれたとしても悲しむことはありません。然しそれを假りにそれとしても、そのお母様の信仰をもつと擴充して上げる爲にも貴君がお母様に代つてお念佛して上げなさるのがよいと思ひます。あなたの信仰が増せばます程、お母様への影響も大きいものがありませう。どうぞ迷はずにお念佛して下さい。

信仰坐談會案内

一日時 來ル

五月七日午後七時半(第一日曜)
五月廿一日(第三日曜)
五月廿八日(第四日曜)

一場所

本郷區東片町七八 橋本樂榮方
(電車白山上下車、美容大學院
電話(85)四九七六番)

一講題

阿彌陀經講話

一講師

中村辨康先生

鐵仰運動ニユース

待望・本部員の全國巡錫

今夏いよく實現!

本會も創立第五周年を迎へ確固たる基礎が出来上つたので、雑誌淨土の刊行による誌上教化のみでなく、今夏を期して第二實動期に入る事となり教化部では計畫を開始した。

兼て地方信者よりの要望もありそれに應えて、中村、佐藤兩師を陣頭に、全國的の布教を試みる事となつた。

去る三月北海道小樽支部の平井善慈氏は上京の途次中村師に懇請する所があつたので、同師も意欲き、之がきつかけとなつて本會教

化部では大々的に教化陣を組織企圖する事となつたのである。

地方支部並びに教區要所々々の緊密なる連絡のもとに、出來得る限り廣汎に亘つて鐵仰運動を徹底せしむる意向であるが、地方信者の方々には速かに、兩師並びに本部講師のあつせんを御申込みになれば教化部に於て計畫上非常に好都合である。

本部では上人鐵仰運動普及の爲め兩師に犠牲的活動を依頼し、又地方同心の方々の熱烈な後援を求めてゐる。

先づ八月は北海道一圓の豫定ではあるが、其後申込みの支部により、その支部のある地方を巡錫範圍にする積りであるから、なるべく早く申込みが願ひたい。



先般本郷昌清寺渡邊義遠師は、法要費を參百圓本會基金に寄附されたので、本會佐藤理事がお禮にお伺ひした所、本會に對する色々の御希望の後、過日法要を執行する筈であつたのを止めたのは老體病氣の爲であり、費用を獻金にしたので、實は以前の維持會二口に更に壹口加へて百八圓(三口百〇八圓の意)を減する積りでありましたと更に壹口を寄贈されたので、佐藤理事も感激して辭した。

陸海軍病院慰問 「淨土」寄附者芳名

五圓	兵庫武庫郡鳴尾村 西方寺
一圓	同 矢野善之助
六圓五十八錢	東京府八丈ヶ島 安保 宏覺
一圓	千葉縣浦安町 斗ヶ澤 洗
一圓	朝鮮鎮南浦明映町 桑島 晋
一圓	盛岡市 浮田 五郎
一圓	函館教區江久組 阿彌陀寺
三圓	大阪市西區道頓堀 杉山喜三郎
一圓	北海教區西組修善寺 井上 龍鳳
一圓	大森區馬込町東三町目 石川 靜吉
一圓	桑名市清水町 五井 とよ
一圓	滋賀甲賀組九品寺 白木 孝準
三十圓	函館教區教務所扱 小川 隆誠
二十圓	同 稱名寺 茅野 照圓
一圓	臺灣花蓮港 木村 欽吾
三圓	朝鮮大邱府八雲町 光明寺
八圓	熊本縣松橋町 中山忠彦扱

長唄・舞踊も加へて

本會婦人部第五回慰問行

本會婦人部では事變以來、傷病兵慰問に意を用ひて軍病院を度々訪れてゐたが、今回第五回の慰問行をなす事になり、會員有志相はかつて、杵屋勝志賀氏、花柳徳助氏等に依頼し、各々快諾を得たので、四月中旬各社の後援を得て長唄舞踊等の演藝慰問をなす事となつた。

訪日北支經濟使節團入京

通譯は本宗僧侶繁族氏

北支經濟使節團は去る三月三十日入京したが、其の通譯官峯族良充氏は淨土宗僧侶であるので、

本宗も一宗を擧げて歡迎し、四月二日午前十一時より増上寺大殿に於て日支兩國の戦死者追悼法會を厳修後、景光殿にて午餐會を開催した。出席者大島大僧正始め北支臨時政府實業部總長王蔭泰氏を始め使節の一行と、政府よりは小柳次官、本宗より里見執行始め各部長、椎尾博士、牧少將（最近淨土宗に入信）大村芝中校長始め多数の出席者あり日支交歡をなして意義深い會を閉じた。

軍馬祭執行

芝増上寺で

其他婦人會員の可愛いお嬢ちゃんたちの出演もある筈で、大いに兵隊さん等をよろこばせる事であらふ。

大阪本誓寺

婦人部の慰問行

大阪市天王寺生玉前本誓寺婦人部では、三月二十八日本會發行の信仰讀本三百部を持參大阪陸軍病

事變發生以來、軍馬のかくれたる涙ぐましい働きに對して、將兵のつきぬ感謝を捧げてゐる所であるが、このほど陸軍省では四月七日を「愛馬の日」と定め全国各地に於て、軍馬の慰靈祭其他愛馬に關する諸多のもよほしがあつた。

佛教聯合會では淨土宗が當番となり、大本山芝増上寺に於て、軍馬祭を當日午後二時より大島法主台下御親修のもとに執行された。功勞馬無言の挨拶には參集のなだみをそゝるものがあつた。

壹圓	中山信次、中山テル
中山澄子、中山菊枝	
中山錦一、中山錦二	
五圓	大阪市西區北堀江町 若松與惣吉
二十圓	群馬縣太田町 大光院
一圓五十四錢	小笠原島母島 清見寺
一圓	東京市 奥田寅夫
一圓	北海教區西組 法國寺
五圓	群馬縣太田町 受樂寺
三十圓	京都市黒谷山内 家田隆教
一圓	佐賀教區唐津組 西急寺
一圓	北海道島根郡小平藥村 白川宏道
一圓	北海教區西組 天應寺
一圓	大阪市南區末吉通新橋ビ 栗山伊三
一圓	群馬縣太田町 内野俊光
一圓	同 同 同 同 同
一圓	同 同 同 同 同
一圓	同 同 同 同 同
一圓	和歌山有田組淨土寺中 松枝
二圓	日豐第一組圓龍寺 小笠原圓長



感想

感激の一夜

長田 たい子

「浄土」読者の會に出席して

「浄土」読者の會の初會が松本樓で催されました。大變な盛會で會場はぎつしりです。

食事が終りに近づいた頃、佐藤先生の司會にて、中村先生の御挨拶があつてから始めにお立ちになつたのは椎尾先生です。

七時までにお出にならねばならぬお約束をかゝへて、時計はもうそれに近づいてをります。

先生は時計の有る方を見ないで少しばかりお話しませうと仰有つて、上人のお人格についてお話をされました。

「えぼしも着ざる法然坊」と仰せられた通り、有りのまゝがお好きで、よそゆきはお嫌ひな方であつたから、我々には極く親しみよいお方である。上人といふ敬語をぬきにして、法然様の御信仰を繼いでゆかうではありませんか。

と結ばれました。そして急いでお歸りになりました。

今、議會中で殊の外御多忙との事です。其なか、御出席下さつた事は皆様が感謝にたえなかつた事だつたでせうと思ひます。

先年私は結集に加はり先生の側で過した事がありました。先生は今お話中幾度も私の方を御覽になります。覚えていらつしやるのでせうか、其度にはつと思ひました。それとも自然の視線が私の方へむけられたのでせうか。

とりとめもなくうつとり考へ乍ら先生のお顔をみつめてゐるうちお終ひになつて仕舞ました。

次は吉田絃二郎先生がおたちになりました。先生のお話は、

澄んだ心を平に持つ事の如何に六ヶ敷いかといふ事を簡明に云ひ現はして下さいました。私が常に悩んでゐる事を先生も亦矢張りお考へになつていらつしやつたのです。

ところが洗練された御思想は行く處までゆきついてゐて、如何にも明朗です。

本當に／＼仰有る通りです。信仰の浅い私は生死の心がまへなどまだ／＼おぼろげです。分りやすい佛教の本を讀んでも、其場限りで、又直ぐ煩惱の己れに戻つてしまひます。

先生の謙讓なお話振りはだん／＼熱を帯びてきました。溫顔のお口元をみつめる私は、一言も、もらさじと、全神経を耳にして伺ひ續けました。

記憶して参つた先生のお作をここに書いて置ませう。

昨日はさとり今日はさとり

ず秋の庭

先生はお母様が御重態になられた時、はる／＼お國へお歸りになり、枕元で歎異抄を讀んでおあげになられたそうです。とお母様は喜びの餘りふとんをかぶつてお泣きになつたと仰有りました。

我子の優しい心遣りが、み佛のそれよりも嬉しく思召されたのではなかつたでせうか。

幼少時代非常な努力をもつて御教育なされたのに違ひありません。其の誠の結晶がこんな立派なお人柄となられたのです。

孝心の姿ほど美しいものはありません。老いた母を持ち、大

勢の子を持つ私は胸をつかれしました。一種の暗示を感じました。

橋本様は浄土ではお名前を存

じあげてをりました。この方のお話の中で

「夫を失つて始めて夫は自分の光明であつた事が分つた」と仰せられた處ですが私はむち打たれました。同感いたしました。女にとつて夫は全く光明です。それが幸福なりちは分りません。自分は夫に對し反省いたしませう。

支部の稻穂様は、お店の方が法然様の教へを受取るやうになつてきたと仰有いましたが、結構な事です。

私も家内中を、信仰に依り正しく、明るく、和合した生活に

入らせたいと心がけて居ります。そしていつかはこの願ひが實現される事を信じて居ります。

まだ皆様方の結構なお話が数々あつて、和やかな中に惜しくも閉會になりました。

司會者の先生方は定めしお骨

折でお疲れたつたでありませう。厚く／＼御禮を申し上げます。

春淺い宵のお堀の水は電燈の影を止めて小ゆらぎもしてゐませんでした。

柳の芽も堅い道路に春雨がバ／＼と落ちてきました。

このもしい會

鳴 海 要 吉

私は、文章を書くことを殆ど本職ほどにしてゐるものです。が、どうも思ふやうにものが書けないで困つて居り、中にも宗教的なことは最も苦手なので、信仰のことは出来るだけ筆には

すまいと心がけてゐたのを今度はつひ／＼茲に書くやうになつた譯ですから、その邊どうぞ御諒讀をお願いします。

先達で、續仰會の御骨折に依つてお催しになつた「浄土」讀

者の會に、私も淨き友の會の一員として出席させて貰ひました。會のあらましや、淨き友の會の成立などについては定めし、本誌の他の所に記されることとせうから、それは略します。さて、淨き友の會といふのは、大體、淨土讀者が篤志的に、支部風に集りを催はして居るものですから、その會の一員としてといふのは、勿論、讀者の一員としてあります。さういふ點から申して、生みの親である「淨土」誌の存在を出来るだけ社會的に意識づける上にも、一年に一二回といふ程度に、どうしてもあゝいふ風な會の催ほしが欲しいものだと思ひます。「淨友會」のやうなものが、成るべく方々に出来ること

も、望ましいことだとも思ふし、それで、それらお互ひの聯絡、意志の疎通といったやうな意味からもよいと思ひますし、同じ方向にある所謂名士方、例へば吉田絃二郎、椎尾辨匡、生田花世諸氏のやうな方々のお話などを承はることなども非常に宜しいことだし、又、打ちあけた話、同行同志がたまに甘い料理でもたべて、或る程度のハメをはずすなどのことも、淨土教の信仰の趣旨から申しても寧ろ非常によろしいんぢや無いかと私は思ふのです。話は少し脱線するかも知れませんが、出来るなら、一年に一遍くらゐ、みな打ち揃つてピクニックとか花見會などでも催はしたらばとも思ふくらゐです。併し、元來さ

ういふことは各宗ともあまりやり過ぎて弊にさへなつてゐるんじゃないかとも想像しますから此の案は撤回しますが、法然は、吾々の人間生活の窮極つまり通俗生活に最も共鳴し、理解し、そこに基點を置かせられての御立教であり御信仰であられたやうに拜察するところに私としてお任せとお綴りがある譯であります。随つて、私元來は複雑な意識の所有者でその懷嚮で數十年を通して來たもので、之は一寸言ひ表はしにくいが、一口に言へば意識的だといふことは、自由思想であり従つて自力的だといふことなのであります。つまり、最も反宗的なのであります。併し、此の反宗的な意識をも尙ほゆるして下さつた法然の

偉大さと深さに私は始めてすがることが出来たのであります。そこから私は引戻して考へて、吾々の通俗生活のうるほひを特に重視して行かなければならないと思ふのであります。それで、花見案まで持ち出したやうなわけであります。「淨土」讀者の會の御講演やお話しに就いてどうといふことも申上げる譯にも行きませんが、それでも、どなたのも實に氣持よく拜聴しました。中にも、橋本樂榮女史の一寸した告白のやうなものでしたが一亡くなつて始めて夫は、自分の力であり杖であつたことをさとつた……といふ意味の言葉に何かしら私は、熱い涙が湧き出て仕様が無かつたことを茲にお打明けします。



信^{しん}仰^{かう}への資^か糧^てに

— 日^{にち}常^{じやう}勤^{こん}行^{ぎやう}式^{しき}解^{かい}説^{せつ} —

中 村 辨 康

(八) 讀^{どく}誦^{じゆ}聖^{しやう}典^{てん}

(釋迦牟尼佛の説かれたる淨土に關する經典を讀誦させて頂く)

佛^{ぶつ}說^{せつ}無^む量^{りやう}壽^{じゆ}經^{きやう} 卷^{くわん}上^げ

同^{どう} 卷^{くわん}下^げ

佛^{ぶつ}說^{せつ}觀^{くわん}無^む量^{りやう}壽^{じゆ}經^{きやう}

佛^{ぶつ}說^{せつ}阿^あ彌^み陀^だ經^{きやう}

(又は)

讚^{さん}佛^{ぶつ}偈^げ (無量壽經卷上中の一節)

四^し誓^{せい}偈^げ ("

眞^{しん}身^{じん}觀^{くわん}文^{もん} (觀無量壽經中の一節)

其他 讚^{さん}重^{ちゆう}偈^げ、發^{はつ}願^{ぐわん}歸^き敬^{きやう}偈^げ等

(備考)

無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の三部四卷を以て「淨

土三部妙典」と云ひ、日常の勤行に於ては四分の一又は半卷な

どに區切つて順次に讀んで繰返へすのであるが、時宜に依ては

四誓偈とか眞身觀文とかの短い一節を讀誦してもよい。全部を

毎日のやうに讀んで味つて行くのに越した事はないけれども、

一般には時間の餘裕を多く持たないから、特別の意味を持つ一

節を抽き出して短時間乍らも心靜かに味つて自分の信仰培養の

糧とするのである。忙がしまぎれにサ、ラサツパに讀誦しては

餘りにも勿體なく且つ讀經の甲斐を失ふことにもなる故、多讀

式でなく味讀式に讀誦せられんことを特に御願ひしたいもので

ある。

また必ずしも音讀でなくても、訓讀でも結構である。また全くお經の讀めない人はお經の代りに御法語の一節でも結構だと思ふ。讀經の要點は念佛のよく申されることに歸着するのであり、念佛の信仰の増し行く爲のものであるから、一般の信仰人としては絶対に必要な條件でもないのである。だから「私はお經が讀めないから」と云つて悲觀することは毫もいらなと思はれる。其邊の御心配ないやう老婆心として申し上げて置きたい。

講 贊

讀經經典は淨土信仰への五つの行爲の中の「讀誦正行」と云はれるもので、信仰培養の第一入門であると共に、常にそれを繰返へして味つて行くことに依て段々御經の深い味が判り、念佛の有り難さを増して行ける重要な信仰行爲の一である。

然し乍ら茲に注意しなければならぬ事は、聖道門流の讀經とはその心の持ち方に於て大變な相違があると云ふことである。聖道門流に於ては經典を讀誦すること若しくは護持すること其事に功德ありとする謂はゞ呪文的効果ありと見るものであるが、淨土門に於ては何處までも信仰への培養にのみ歸一せしむるので、經典讀誦に依て幾分でも如來様への信仰が養はれなくてはならぬのであるから、唯だ讀誦しさへすればそれで満足だと考へて居るもの

ではないのである。

淨土門では「私の讀む經典の功力」ではなくして「如來様への信を深くさせて頂く爲に如來様の事を説き明かしてある御經を讀み味はさして頂く」のである。

聖道門では科註法華經の冠註に讀誦の時も意持として「釋迦牟尼佛の代りになつて世尊の坐し給ふ獅子座に坐したつもりでシツカリと坐を構へ、人間は勿論、目に見えないところの帝釋梵天や夜叉阿修羅健闥婆などの天部魔神に至るまで我が説法を聞いて居る」と思つて讀誦すべきであると云ふやうな意味のことを云つて居る。随つて顯界冥界の色々な衆生が釋尊の教法を自分が代説して居る其聲を聽聞して居るのだから、讀誦其事に功德があるとするのである。だが其時御本人は如何あるべきかの問題が残されて居る。そして顯界冥界の聽聞衆の心境如何の問題が残されて居る。

無論御本人だつて釋尊の御代説とはいへ、やはり人間としての聽聞衆の一人でなければならぬ。だから讀經者其人も其お經の聲に聞き惚れて心が淨化され菩提の覺路が明らかになつて來なければならぬのである。讀むには讀んだが、何の感銘も起らず素通りしたと云ふだけでは、畢竟泥工の棒たるに過ぎないではないか。また如何に冥界の神秘的力を持つ者と雖も、單に聞くと云ふことだけでなく其處に聞いて味つて覺路涅槃の道が開けて來ない事

には、やつぱり泥工の棒に聞かせたと同じことで何の意味もなさない。第一讀んで居る御本人が上の空であり、菩提涅槃の一路が開けた感じがなければ、況して他の者に感銘の起る筈もなく、冥界の神秘力ある連中は「あゝあれでは駄目だ」と聲を聞いたただけで顔を横に向けてしまはしないにも限らないのである。いくら釋尊の代りになつて獅子座に坐つたつもりで氣位ばかり豪勢に構へて居たところで、御本人に覺醒が起らなければ、功德どころか、けおどかに過ぎない事になつて、釋尊に對しても誠に相濟まぬ事になるのだから、單に讀みさへすればそれでよいと云ふ譯のものでは決してない筈である。

求道の念が熱烈に燃え、修行に精進して居られる人なら格別、唯だ頼まれたからお經を讀まねばならないと云ふ位の氣構へでは、自力門だけに「我が讀誦の功德を以て」と云ふには一寸逡巡たるものがありはしないかと恐れるのである。

其處へ行くと淨土門の方は何處までも我が力ではなく如來様から頂くのであるから、お經を讀まして貰ふのであり、味はさせて頂くのであつて、釋尊の御代理と氣張ることもいらず、顯界冥界の諸の衆生が聞いて居やうが居まいが貪着はないのである。第一に自分が感銘し自分が養はれるのである。随つて其感激に他の顯界冥界の人達が同感したら、多々益々辨ずであつて、それだけ如來様の光明が輝くことにもなるのであるから、こちらも愈々益々

々感銘を深くする譯である。

此故にお經を讀まして頂く時には我が信仰の糧となるべく一句一句を味つて行くのがよいのである。例へば「如是我聞」と云ふ句では「阿難尊者が嘗てかう云ふ事を聞いたとお話しになるのであるよ」と思ひ「一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園」と云ふ句を讀んだ時は「或る時お釋迦様が舍衛國の祇園精舍に居られて」と思ひ「與大比丘衆千二百五十人俱」といふ句の時は「千二百五十人と云ふお弟子達も御一處だつた」と思ふと云ふ工合に、一句一句其言葉の通りに心で思つて行くと、案外雜念や妄念が浮ばず、段々心が純粹になつて、謂ゆる讀經三昧の心境に浸ることが出来るのである。中には六ヶ敷文句があつて意味が判らないところもあらうが、それはそれとして次ぎへうつればよいので、其内には「讀經百遍義自通ず」でおぼろげには判るやうな氣になるものがあり、また何うしても分りたかつたら其道の人に聞けば凡その事は分る。勿論専門的に學ぼうとするのでないから餘りくはしい意味などは根柢り葉柢り穿鑿する必要もあるまい。要は信仰が増進すればよいからである。

かう云ふ心掛けは最初の香偈の時からも必要なことで、先づ始めにリンを三つとか五つとか七つとかならず時、其チーンと云ふ響に心耳を澄ますやうにすれば、おのづから心が落着くから順次に香偈三寶禮等々と續けて來て、段々心が如來様の方へ傾き雜念

が起らないやうになつた頃、この讀經に取りかゝるならば、コンデションがすっかりよくなつて居るので、讀んで居る自分自身にも有り難い敬虔な氣持が濃くなつて愈々益々有り難さの念が増すのを覺えるのである。

かうした事を繰り返へして行けば、雜念の起り易い念佛唱名のやうな單純な繰返しにも、人並以上に雜念の起るのを防止するところが出來や。人間から雜念妄念を取り去るのは人の顔から目鼻を取り去るやうに困難な事だと云はれて居るけれども、見方に依れば、一種の精神訓練と云はれないこともなくはないのであるから、訓練の如何に依つては短い時間ならば雜念の起らない状態にもなり得る可能性は充分あるのである。

法然上人の御法語の中に

「妄念餘念をもかへりみず、散亂不淨をも云はず、唯だ口に名號を唱へよ。もし能く稱名すれば、佛名の徳として、妄念おのづから止み、散亂おのづから靜まり、三業おのづから調ひて、

願心おのづから發るなり」

と、妄念の止み、散亂心の靜まり、如來の大悲を願ふ心の熾烈に起る其心境の芽出度きことを云つて居られるのであるから、妄念雜念の起ることを悔む必要はないけれども、若し出來るならば雜念妄念の起らない状態にはなりたいものである。

随つて其訓練の爲には、如來様への愛念の増して行く信心の増

上と共に、意味の變化に富むお經の讀誦に依て、雜念の起る餘地を與へない訓練も極めて重要なものであり行爲であると云はねばならぬ。

かう云ふ事を云ふと、それは一種の陶醉境と喜ぶことであつて、阿片を呑んで喜び酒を飲んで喜ぶ心境と同じやうな一種の自慰的な行爲ではないかと批難する人があるかも知れないが、それは信仰と云ふものを物的に見ようとするもので誤まれるも甚だし

いと云はねばならぬ。酒や阿片の陶醉は酒や阿片と云ふ物的麻痺藥の然らしめたもので、其結果として亡國的な頹廢的な心が養はれるのであるのに反して、信仰に於ける純粹な心境は愈々益々健全な心の持主となり、人生觀に透徹し、常識が發達し、正義觀が強まり、魂の決着が出來、何んな苦難にあつても敢然として之を切り抜け得る積極的な剛健にして而も柔軟な彈力ある精神を養ふことが出来るのであるから、誠に其結果から云へば天地雲泥月と泥龜の差であつて、とても比較にも何にもならないのである。

「禪三昧爲食」と云ふ言葉がある。淨土に居られる菩薩は純粹な精神を養ふことを以て「食物」として居るのだと云ふのである。即ち如來様への思慕が純粹な心境と相關々保的に段々太つて行くから「食」と云ふのである。

信仰が單に一度如來の大悲本願を信じたら、それでもう卒業で

何時迄も其處に止まつて居てよいと云ふならば、信仰への糧も何
も要らないのだけれども、何事にも生長を望み向上發達を望む人
間の氣持は決して一つ處に足踏みして居る事を以て満足して居な
いのであるから、信仰も段々深まり段々生育して行かねばならぬ
のであるが、段々深まり段々生育して行くには矢張り其生育に要
する糧が必要である。隨て其精神的の糧としては愈々益々純粹
な心境を以てしなければならないのである。

私達人間の心は「我執」があるからそれが爲に伸びやうとして
も中々伸びにくいものである。それで我が心を出来るだけ純粹に
して陶冶性を養ひ陶冶性を豊富にして行けば、自から「我執」も
薄くなつて如來様への思慕信仰が深まる道理である。

だからそれは決して酒の酔や阿片の陶酔と比較すべきものでな
く、また絶對に比較してはならぬものである。

物質的なものにしても、おいしい御馳走を頂く時、うまいと思
ふことは、決して悪いことではない。喰べ過ぎてお腹をこはすな
らばいけないけれども、うまいものを喰べるのに、何にも無理に
「うまいと思つては陶酔になるからいけない。うまいと思ふな」
と考へる必要は毫もないのである。況して之は精神上の糧であつ
てそれが健全な精神を養ふのに必要であつたとすれば、信仰を基礎
とする限りに於ては物的なものと違つて食傷する心配はないので
ある。但し食物にも健全な食物と不健全な食物とあるやうに、信

仰にも健全な信仰と不健全な信仰とがあるから、其邊の取捨選擇
は必要であり、またいくら健全な食物でもおいしい餘りにお腹と
相談せずに食へてはいけなさと同様に、信仰上でもいくら信仰の
糧だからと云つて、何時の間にか信仰はそつちのけになつて、糧
そのものに執着してしまつては、もう信仰ではないのだから邪道
的なものに變化してしまふものである。

坐禪に「一色邊」と稱する魔境があるさうであるが、若しか
る魔境に止まるならばそれは一種の執着であり陶酔であつて、米
が酒に變化し葡萄が葡萄酒に變化したやうなもので陶酔物となつ
てしまふのである。

然し他力の信仰に於ては、何處までも何處までも如來様の慈悲
悲を仰ぎ、如來様の御心に添うて行かうとする孝順心を貫いて行
くのであるから、決してそんな魔境に止まることもなく邪道に陥
ることもないのである。

また假りに自力的な心が起つて暫くさうした心境に陥つたとし
ても、一と度他力の信を経験した者は、それでは全然落着を失ふ
のであるから、再び他力を仰ぐ健全な眞面目な信仰に引き戻され
ずに居れないであらう。

何れにしても私達は凡夫である。よし瞬間純粹な心境になり得
ても直ぐ散亂心になり雜念の中に追ひ戻されるのであつて、自惚
れたくても自惚れられないのであるから、さうした心配はむしろ

御無用と云ふものである。

要は何事も如來様への信仰の糧となつたらよいのである。段々心を純粹にし如來様の慈悲を感受する感受性を養つて行けばよいのである。

此意味に於て此の「讀誦經典」は正しく「正行」の一たるを失はないものであると共に、全く一つの近道でもあるやうである。

と云つても「讀誦萬能主義」になつては困るのである。お經は例へて云へば藥の効能書見たやうなもので、念佛の信仰を勧める爲のものであるから、お經を呪文か何かのやうに心得てしまつて念佛の信を何處かへやつてしまつては何にもならない。

念佛は決して呪術的信仰ではない。呪術的信仰は未開人的信仰である。理窟なしに呪文其ものに不可思議なる効果ありとする不合理的な信仰である。

然るに念佛の信仰は決してそんなものではない。決して呪文的に考へてはいけないのである。随つて讀誦も讀誦其事に功德あるのでなく讀誦がよりよく味讀されることに依て讀誦者の信仰が幾分でも増進したこと其事に功德が自證されるものでなくてはならぬ。

「此の功德を以て」と回向し得るやう、自分の信仰増進が讀誦や唱名に依て自分に認識され得るやうに、如來様の加被護念を仰ぎつゝ讀誦し唱名して行く可きである。

「信仰への糧」

氣張らずしてしかも實際以上に信仰への糧となり、漸々に信仰を太らして頂くための「讀誦三昧」！

何とこの淨土教の行事の悠々迫まらざる襟度こそは、全く有り難い極みであると云ふべきである。

(字解)

讀誦——讀は字を見ながら讀むことであり。誦はそらで讀むことである。だから初めのうちは字を見ながら讀まねばならぬが、意味を味ひつゝ讀むにはそらで讀む方が意味を取り易いし、また訓で假名交りに讀むのは初めての人にはよいけれども、時間がかかるだけに、少しなれると雜念が交り勝になる恐れがある。此故に少し馴れて來たら音で棒讀にする方が、變化が早いから、何うしても雜念が交りかねる譯である。

聖典——お經のことである。或は妙典とも云ふ。お經を敬つて云つたのである。

淨土の三部經に就て簡單な解説を書くといふと思つたけれども、紙數が延びるから、何時か機會があつたらと思つて、今は割愛させて頂く。

讀佛偈は「光顯魏々」の一節であり、四誓偈は「我建超世願」のことであり、眞身觀文は「佛語阿難」の一節であり、讀重偈と云ふのは「東方諸佛國」の一節、發願歸敬偈は「道俗時衆等」の一節である。

編輯後記

◆櫻が満開だ。暖かい春の日射しが、人々を戸外に誘ひ出す。蒙々たる砂塵を浴びながら、人々は花の下に春を娛しんでゐる。古來日本人は花を愛する國民である。非常時は一層にこの古武士的な花に人々を引付けるらしい。

◆編輯子は今年花もたのしめないかと少しばかり憂鬱になつてゐた處が、吉田絃二郎先生のお宅へおうかいひした折、雨の中をわざ／＼附近の美しい花の景色を生に御案内して頂いて、雨中の花を眺めて、生返る心地がした。霧雨の中にしつとりと浮き出した櫻と縁は一幅の繪の様であつた。武蔵野にかくも美しい景色がある。浄土は遠くに求めるまでもない。

◆本號の巻頭は浄土宗管長、本會總裁郁芳隨圓親下の御法話を以

つて飾るを得た。短くはあるが非常時信仰の眞髓にふれた御文章として一讀をおすゝめする。

◆吉田絃二郎先生の隨筆と共に佐藤春夫先生が久しぶりに念佛者の精神生活にふれる一文を御寄稿下された。「念佛者は強し」の言葉こそ、時代の宗教への言葉である。

◆北支からは柴田玄鳳師が支那人氣質の一面を把えた興味ある隨筆と共に自筆のさし紙をそへて送つてこられた。「讀者の會」に出席された鳴海、長田の兩氏から感想を寄せられたのも、會の影響する處を考へさせる注目すべき事柄だと思ふ。

◆表紙は熊倉氏が本會のため特に御好意を以つて執筆せられたもの、先月の表紙も好評を博したが、今月號はまた一段と冴へて本誌に光彩をそなへたものであると信ずる。(道)

◆本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◆御注文の場合は種類、部数、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尚送料をお忘れなき様お願い致します。

◆勝手乍ら代金引換は一切お断り申上ます。

◆その他お問合せは往復はがきかまたは返信料同封で、御願します。

◆本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社
會社

東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

浄土 五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和四年四月二十日印刷納本
昭和四年五月一日發行

(定價十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「浄土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料五厘)

一ヶ年 金一圓
(送料不要)

會費

法然上人鑽仰會刊行圖書

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村辨康著

(四六版一三〇頁總ルビ付)

法然上人の信仰生活

定價三十錢
送料六錢

中村辨康著

(四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價二十錢
送料三錢

藤井實應編

(增刷中)

菊半截一四四頁
總ルビ付

法然上人法語抄

定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫著

特製ノート型、天金
十二ボ総ルビ、三〇〇頁

法然上人
別傳 掬水譚

定價四圓五十錢
送料二十二錢

中村辨康著

(四六版七〇頁總ルビ付)

講話一枚起請文

定價十錢
送料三錢

大野法道著

(四六版六〇頁總ルビ付)

法然上人

定價十五錢
送料三錢

中里介山著

(三六版二五〇頁クロース装)

法然上人傳

定價六十錢
送料六錢

佐藤春夫・吉田絃三郎・岡本かの子
倉田百三・郁芳隨園著

(增刷中)

我が信仰

(四六版總ルビ付)
定價六錢
送料三錢

法然上人鑽仰會編

(菊版一一〇頁總ルビ付)

念佛讀本

定價二十錢
送料六錢

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十四年四月廿日印刷納本 昭和十四年五月一日發行

淨

土 第五卷 第五號

定價金十錢 (送料五厘)
滿鮮臺灣等
外地定價金十一錢